

俺のクラスメイト二人が痛いんだが

カナリアP

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東京都内にある普通の中学校。

そこでは二人の違う系統の厨二病を患った少女たちに懐かれた一人の少年がいた。

これは、その少年と少女たちの中身空っぽのメッセージ記録である。

新作「僕の幼なじみがバズーカを向けてくる」 停滞中

新作「きょうもキョウとてゲーム三昧」そろそろ書く

最新作「上京した元読モの幼馴染から性転換を勧められた」更新中

目次

少女たちと普通の一日	1
少女たちと趣味の話	4
少女たちと不機嫌な理由	8
少女と朝のひと時	12
少女と譲れない意思	15
少女たちの噂	18
少女たちと歌姫の宴	30
少女とグダツと　　蘭子編	36
少女とグダツと　　飛鳥編	39
4 2 期二年四組裏掲示板6 2 スレ目	42
少女たちと1 4 歳①	49
少年少女たちの夏休み	53
AIは考えることをやめない	57
少年少女はすれ違う	60
カワイイ洗脑中(前編)	64
最終回直前特別編　二年四組の学園祭	72
カラマス記念特別編　ギフト	79
僕らについて(後編)	82
Stand by me	87
Next STAGE!	94
後日談	99

少女たちと普通の一日

ブリュンヒルデ：煩わしい太陽ね！

ハル：おはよう、神崎

ハル：今日は学校に来るのか？

ブリュンヒルデ：神の試練は天高くアポロンが昇る時故

ブリュンヒルデ：それまでは下界に降りる運命である

ハル：今日は英語の小テストだぞ

ブリュンヒルデ：そに

ブリュンヒルデ：そのようなもの悠久なる果てに置いてきた

ブリュンヒルデ：叡智の僕よ

ブリュンヒルデ：私の呼び掛けに応じ、その魔道書を献上するがい

い！

ハル：悪いがノートは見せないぞ

ブリュンヒルデ：いじわる

1 / 2 のボク：やあ

1 / 2 のボク：おはよう

ハル：おはよう

ハル：今日は学校に来るのか？

1 / 2 のボク：そのつもりだが

1 / 2 のボク：ボクとしては義務教育での勉学に意味があるとは思

えないが、まあ教養を得ないと創作にもアイドル活動にも支障が出そ

うなんでね

1 / 2 のボク：ま、暇つぶしがてらにと思ってね

ハル：学校を暇つぶしと言えるお前すげえな

1 / 2 のボク：そうかな？

1 / 2 のボク：時間は有限で、学校へと通える日々も一生のうちで

はほんの僅かな時間でしかない

1 / 2 のボク：だとしたらそれを有意義なものとするのは当然のこ

とだとボクは考えるけどね

ハル：終わった？

1／2のボク：最近少しボクの扱い雑じゃないかい？
ハル：分かっているなら自重しろよ

ブリュンヒルデ：我が従者よ

ブリュンヒルデ：我が魂の契約に従い貴様に使命を下す

ハル：なんだよ

ハル：授業中に送ってくんな

1／2のボク：そう言いながらスマホを弄っているキミがそれを言う権利はないと思うけどね

ブリュンヒルデ：定められし晩餐の予定だが

ブリュンヒルデ：我が調律者の命によりその時をずらす必要があるようだ

ブリュンヒルデ：ならば貴様も魔王の帰還を果たすまで待つていてくれるか？

ハル：ヤダ

1／2のボク：ばつさりだね

ハル：今日はカレーなんだよ

ハル：何が悲しくて神崎を待たなくちやなんのだ

1／2のボク：おや、カレーか

1／2のボク：今日はボクはオフだ。ご相伴に預らせて貰ってもいいかい？

ハル：いいぞ

ブリュンヒルデ：いじわる!!!

ブリュンヒルデ：従者よ

ブリュンヒルデ：我が贄はまだ残っているか？

ハル：あるぞ

ハル：ついでに宿題も持ってこいよ

ハル：今二宮の見てるから丁度いい

ブリュンヒルデ：えー

ブリュンヒルデ：神の試練は極めて苦難であった

ブリュンヒルデ：我が強大な魔力を持つてしても補給を受けたところで

ハル：ならデザートはいらん

1／2のボク：チーズケーキが美味しかったんだ

ブリュンヒルデ：月の魔力により我が漆黒の翼は羽ばたかん！

ハル：月出てないけどな

ブリュンヒルデ：言わないで!!

ブリュンヒルデ：闇に飲まれよ！

1／2のボク：ああ、お疲れ様

1／2のボク：毎度のことながら、春川くんの扱きは容赦がないね

1／2のボク：まあそのおかげでアイドルになつてからも成績は落ちていないけどね

ブリュンヒルデ：我が叡智の従者の能力は絶大である

ブリュンヒルデ：それ故対価もそれ相応ではあるがな

1／2のボク：キミの、ではないけどね……

ブリュンヒルデ：？

1／2のボク：おやすみ、明日も頑張ろう

ブリュンヒルデ：深遠なる眠りを！

少女たちと趣味の話

1／2のボク：もう少し展開をゆつくりにして描写を丁寧にした方がいいかな？

ブリュンヒルデ：名も無き観衆の心を掴むためには神速も大事だがブリュンヒルデ：重き迫力で魅せることも要であろう

1／2のボク：ふむふむ

1／2のボク：なるほど、アドバイスありがとう

1／2のボク：やっぱボクとキミの趣味は合うみたいだ

ブリュンヒルデ：我々は運命が交差し魂の共鳴を果たした同志

ブリュンヒルデ：久遠の絆は最果てに至ろうと不滅である！

ハル：なあ

1／2のボク：おや？

1／2のボク：学校は終わったのかい

ブリュンヒルデ：闇に飲まれよ！

ハル：おう、お疲れ

ハル：そうそうお前らに聞きたいことがあるんだけどさ

1／2のボク：これは珍しい

ブリュンヒルデ：我が強大な魔力を借りたいか

ブリュンヒルデ：果たしてその叡智を持って制御できるか？

ハル：いや明日から休日じゃん？

1／2のボク：残念なことにボクはお仕事だけどね

ブリュンヒルデ：我は使命を経て魔力の補充のためしばしの休息である！

ハル：だからさ、暇だし何かDVDでも借りようかとTSUTAYA Aにいるんだけど

ハル：なんかオススメない？

1／2のボク：DARKER THAN BLACK —黒の契約

者—

ブリュンヒルデ：ローゼンメイデン

1 / 2のボク：シユタインズゲート

ブリュンヒルデ：F a t e / s t a y n i g h t

1 / 2のボク：攻殻機動隊

ブリュンヒルデ：とある魔術の禁書目録

ハル：多い多い

ハル：一作品でいいんだよ

ハル：しかも2時間くらいで見れるのでいいから

1 / 2のボク：だったらイヴの時間かスカイ・クロラだね

1 / 2のボク：どちらも世界観が独特で表現が素晴らしいんだ

1 / 2のボク：同じ理由でG h o s t i n t h e s h e l

1、そしてイノセンスもおすすめだよ

ハル：攻殻機動隊だったか？

ハル：それにするか

ブリュンヒルデ：ぐぬぬ……

ブリュンヒルデ：厨二病でも恋がしたい！

1 / 2のボク：なっ

ハル：あー：なんだっけそれ

ハル：京アニの奴だよな

ブリュンヒルデ：総集編もあるしオススメだよ！

ハル：口調崩れてるぞ

ハル：んーだったらそれも借りるか……

ブリュンヒルデ：我が封印されし神の教典を持ち合わせている

ブリュンヒルデ：従者と共に幕を見ても良いぞ！

1 / 2のボク：くっ

ハル：円盤持つてんのか

ハル：じゃあ

1 / 2のボク：待ちたまえ

ブリュンヒルデ：何奴!?

ハル：どうした二宮

1 / 2のボク：ボクは日曜はオフなんだ

1 / 2のボク：だからキミの時間が空いていたらでいいのだが

1 / 2のボク：映画でも見に行かないかい？

1 / 2のボク：見たい映画が

1 / 2のボク：あつてね

ハル：日曜か

ハル：別に構わないけどお前一応アイドルだろ

ハル：良いのか

1 / 2のボク：きちんとな変装はするし

1 / 2のボク：それにまだまだボクは観測されるには自身の存在を

固められていない

1 / 2のボク：今のうちに

1 / 2のボク：友人と親交を深めるっていうのも良いじゃないか

ハル：良いなら良いけどよ

ハル：Pさんには確認取っておけよ

ハル：で、何が見たいんだ？

1 / 2のボク：打ち上げ花火、下から見るか、横から見るか

1 / 2のボク：だよ

ハル：あれか

ハル：でもあれってレビュー酷くなかったか？

1 / 2のボク：大衆の流れに逆行するのもたまには良いさ

ハル：ふうん？

ハル：分かったよ、日曜な

ブリュンヒルデ：ズルい!!

ハル：今度はなんだ……

ブリュンヒルデ：我が従者よ！

ブリュンヒルデ：魂の契約に従い貴様に新たな使命を遣わす！

ブリュンヒルデ：外界へと赴き我を天界よりの灼熱の業火から漆黒

の楯で守るのだ！

ハル：日傘くらい自分で持てよ

ブリュンヒルデ：むうううう!!!

ハル：分かった分かった

ハル：で、何しに行くんだよ

ブリュンヒルデ：遊戯なき世界など世界に非ず

ブリュンヒルデ：序曲の章、終焉たる景色での物語を

ハル：久しぶりに難解なの来たな……

ハル：LINEだと字幕が見えねえからなあ

1/2のボク：ノーゲーム・ノーライフ　ゼロかな？

ハル：あああれか……といっても原作見てないんだが

ブリュンヒルデ：不要である！

ブリュンヒルデ：原典へと至る鎮魂歌の補足は我が承ろう

ハル：休日が休日じゃなくなってしまった……

1/2のボク：自業自得だと思うけどね

1/2のボク：キミは甘いのだから

ブリュンヒルデ：我が従者として当然の運命!!

—————

「危ない……厨二病を見られるのだけは阻止できた」

「しかし二人で映画か……仲のいい男女でも、二人で行くというのはそのイメージはボクでもわかる」

「……服を選ばないと」

「……何故あそこまで心揺さぶられたのであろう」

「友と一緒に外界へと足を運ぶなどと……しかも春川くんと」

「……………ドレスで行ったら、怒るかな」

少女たちと不機嫌な理由

ハル：マジか

ハル：嘘だろ

ハル：おい

ハル：やべえ

1／2のボク：語彙が死んでるよ

1／2のボク：珍しいねそこまで取り乱すなんて

ブリュンヒルデ：凶月の魔道士に心を操られたか！

ハル：かもしれない？！

ブリュンヒルデ：！！！！

1／2のボク：驚いた

1／2のボク：まさかのキミがそんなことを言うなんて

ハル：でもあの人はそんな禍々しいのじゃなくてだな……

1／2のボク：じゃあなんだい？

ハル：女神……かな

1／2のボク：は？

ブリュンヒルデ：何言ってるのこの人

ハル：女神って本当にいたんだな……

1／2のボク：そういうのいいから

1／2のボク：早く回想に入るといい

1／2のボク：今のボクはとても機嫌が良いから特別に聞こうじや

ないか

ブリュンヒルデ：懐旧の旋律を拝聴しようではないか

ハル：いやさ

ハル：さつき本屋に行ったんだよ

ハル：欲しい漫画があつてさ

ブリュンヒルデ：それは如何な魔道書「グリモア」か？

1／2のボク：そういうのは後にしてくれ

1／2のボク：続きを

ハル：そしたらさ

ハル：いたんだよ

1／2のボク：誰が？

ハル：ふみふみが!!!

1／2のボク：ふうん

ブリュンヒルデ：ふむ

ハル：変装してたけどすぐに見抜けたね！

ハル：もうね、雰囲気かね

ハル：他の人と違うの

ハル：オーラみたいなの？

ハル：思わず叫びそうになったけど

ハル：そういうのってやっぱ迷惑じゃん？

ハル：あつちもオフなんだろうしさ

1／2のボク：そうだね

ブリュンヒルデ：であるな

ハル：でもやっぱり気になっちゃってさ

ハル：漫画のこととか忘れてよく分からん棚の本を選ぶフリしてチ

ラチラ見ちやっただよ

1／2のボク：不審者だね

1／2のボク：それも相当な重症だ

ブリュンヒルデ：我が王国の騎士団に通達せねばならぬか

ハル：そしたらあつちも気づいたみたいでさ！

ハル：困ったように笑って、人差し指を口元に添えて

ハル：言わないでくださいね？ 的なニュアンスのジェスチャーをし

たんだよ！

ハル：女神かよ!!

1／2のボク：蘭子、明日のレッスンって何時からだったかな

ブリュンヒルデ：ヒュドラを召喚せし刻限である

1／2のボク：なら9時くらいキミの部屋へ行こう

ブリュンヒルデ：承知した

ハル：話聞けよおおおおお!!!

1／2のボク：聞いてただろう

1 / 2のボク：何か不満でもあるのかい？

ハル：何か反応があつてくれても良いだろ

1 / 2のボク：そうか

1 / 2のボク：悪いがボクたちは同じ事務所だからかなりの頻度で会つていてね

1 / 2のボク：どういう感想を言つたら良いか分からないな

1 / 2のボク：素直にキモいと罵倒すれば満足してくれるのかな

ハル：辛辣過ぎない？

ブリュンヒルデ：汝の胸に言霊は深く突き刺さるであろう！

1 / 2のボク：まあ春川くんが文香さんを推しているのは知つていたけれど

1 / 2のボク：ああいう人が好みなのかい？

ハル：そうだな

ハル：上手く言葉にできないけど……ああいう大人しめな人が好きなのかもな

1 / 2のボク：ふうん

ブリュンヒルデ：そう

ハル：なんだよ

ハル：なんか凄まじく恥ずかしいことを言つた気がする

1 / 2のボク：そろそろ寝る時間だ

1 / 2のボク：悪いがボクはもう寝させてもらうよ

ブリュンヒルデ：闇に飲まれよ

ハル：え、なに？

ハル：なんでそんな唐突に

ハル：神崎とかいつもの！はどうした

ハル：おいつてば

ハル：おーい！

――

「……大人気なかつたかな」

「でも、さすがにこれは彼がデリカシーがないというか、無神経な気が

するけれど」

「……………」

「ううう……………バカバカバカ」

「大人しめな人……………」

「……………深淵を纏いし闇の衣を着飾ってみる、とか」

「……………」

1／2のボク：おやすみなさい

ブリュンヒルデ：おやすみなさい

少女と朝のひと時

ぼうつとした意識が耳障りな音で強制的に覚醒する。

嫌だ、起きたくないーと思うのは人間として当然の摂理で、惰眠を貪りたいということはそこまで罪だろうか。

……そういえば怠惰は大罪だったと、少し微笑む。

無駄な思考ができるくらいには頭は再起動を終え、この音がどういう意味を示しているかをようやく思い出した。

愛用しているスマホを片手に、画面に映し出されている名前を見て少しみつともなく笑みが溢れながらーボクは彼と繋がり始める。

「ーおはよう、約束は守ってくれたんだね」

『まあな。それと、おはよう。大阪はどうだ?』

「人が多いね、向こうほどじゃないけど、こちらのが体感、少し騒がしい」

『ふうん……今日はライブでいるんだろ? モーニングコールを頼むほどなんだし、クマとか作ってないだろうな』

「抜かりはないよ、ちゃんと健康は管理している。アイドルは色んなことを気をつけなくちゃいけないから」

そっか、と素っ気なく応対する彼だが、先ほどの心配してくれたのだろうと一人想像、いやこれは妄想かな?

「そっちはどうだい。日常はお変わりなく?」

『そうだな。神崎はいつも通りだと思うし、特に何も無い。ていうか一日二日で何も変わるわけないだろ』

「そりゃあそうだね。十何年も変わらないんだから」
いや、少し変わったかもしれない。

アイドルになったことも。

いま彼と話していることも。

『まあ明日には帰ってくるんだろ? お土産、楽しみにしてるからな』

「ふむ、残念ながらボクは家族にしかお土産を買ったことがなくてね。どんなものが嬉しいかは是非とも参考までに聞かせてもらおう」

『大阪か……そうだなーあ』

「うん？」

『ふみふみのライブ限定グッズを』

切った。

さあ、今日は張り切つていこう。

ボクという存在を、大衆に解き放つんだ。

――

ハル：お土産な、そうだな

ハル：だつたら衣装姿の写真くれ

ハル：お前のライブ記念に欲しい

1/2のボク：キミさ、今とんでもなく変態チックなこと言つてるの分かつてるかい？

1/2のボク：同級生の露出の少し多い服姿が欲しいって本人に言つてるんだよ？

1/2のボク：はつきり言つて普通ならドン引きするところさ

ハル：いいだろ二宮は普通じゃないんだから

ハル：それにたまにはお前がアイドルだつてことを覚えておかないとな

1/2のボク：……キミ、未だにボクらをアイドル扱いしてないからね

1/2のボク：まあ、そこが気楽なだけどさ

1/2のボク：良いだろう、自撮りは趣味じゃないがせいぜい大切にしてくれ

1/2のボク　　さんが写真を投稿しました

ハル：ライブ、頑張れよ

1/2のボク：キミを魅せられないことを残念に思うほどにね

1 / 2のボク：会場に来てるなら先に言ってくれ!!!!
ハル：俺は一言も大阪にいないとは言っていないぞ^^

少女と譲れない意思

黄金劇場く終止符の指輪く

此度は多種多様な異界の同種たちが集う場にて、我が従者と共に劇場へと足を運んだ。

灼熱の業火と様々な魔力に当てられ我が力が思惑通りに動かせぬことが気がかりであったが、従者はいち早くそれに気付くとすぐさま盾となり魔力の補給として、禁断の実を絞ったポーションを錬金し、我へと献上してくれた。

そのおかげで十全な状態でメモリアルを取り込めるといふもの。とても感謝している。

今回のメモリアルは、我も興じている無^{ノーゲーム・ノーライフ}戯無生。その序章として語られる言わば零の物語だ。先駆者によるところ凄まじく強大かつ精巧な造りのため我も久々に胸踊っていた。

劇場内は未だに熱冷めぬのか我と同じ異界の者たちが集っていた。ざわめきにより、従者は我の耳触りにならぬかと眉をひそめていたが、始まって仕舞えば皆はすぐに虜となり我も気兼ねなくメモリアルに集中することができた。

内容についてはあえて語らぬ。自身の心眼では是非定めて欲しい。

私の評価は星1.0のところー星1.5だ！

従者もそのメモリアルに魅了された様で我も満足である。

では、今宵もアルテミスの愛と共に深遠なる眠りに着くとしよう。

ー

ハル：神崎、あのさ

ブリュンヒルデ：何用だ？

ハル：いやブログ見たんだけどあの記事内容はちよつとどうかと思っとな

ブリュンヒルデ：!?

ブリュンヒルデ：ふとの

ブリュンヒルデ：人の日記を勝手にみん a i d e
!!!
ブリュンヒルデ：見ないで!!!

ハル：いや公開してんだからそれは言えないだろ

ハル：じゃなくて、あの内容だとどうにもなんかデートしましたって書かれてる気がしてな

ブリュンヒルデ：b s かな

ブリュンヒルデ：ばかさ

ハル：落ち着け

ブリュンヒルデ：莫迦な！

ハル：いや分かかってるんだが、どうにも従者っていうと他のアイドルのことは捉えられないし

ハル：お前プロデューサーのことは調律者って言ってるんだよな

ブリュンヒルデ：従者は従者であり眷属である我が僕であろう

ブリュンヒルデ：何の問題がある

ハル：大有りだろ

ハル：アイドルが男と二人で映画なんてさ

ハル：だからってわけじゃないけど邪推されてもアレだし

ブリュンヒルデ：邪推？

ハル：あー

ハル：アイドルのファンってそこらへん厳しいだろ？

ハル：俺はお前の邪魔はしたくないんだよ

ハル：？

ハル：神崎？

ブリュンヒルデ：分かった

ブリュンヒルデ：直す

ハル：あ、ああ…同胞とか仲間とかにしといてくれ

ハル：誰が注釈に俺のことを書けと言った！
ブリュンヒルデ：知らない！！

少女たちの噂

110：魔王軍親衛隊 2017/8/29 11:33:38

ID：1Z2Hy3ccsc

最近ダークイルミネイトもテレビに結構出てきたよな

111：魔王軍親衛隊 2017/8/29 11:38:49

ID：8ExTlfpkik

今夜20時の歌番組にも出るぞ

112：魔王軍親衛隊 2017/8/29 11:42:08

ID：aBTSL8pbDv

絶対見る

113：魔王軍親衛隊 2017/8/29 11:45:58

ID：4e6FBR56oF

残業死ね会社死ね

114：魔王軍親衛隊 2017/8/29 11:49:07

ID：p4DUNsKb5I

>>113

副業にうつつを抜かすとかwww

俺らは親衛隊やぞ

115：魔王軍親衛隊 2017/8/29 11:54:43

ID：yRLFBqUAE5

ワイ親衛隊

日課のコール練習20セット終了

良い仕事をした日は飯がうまい

116：魔王軍親衛隊 2017/8/29 11:58:18

ID：F5h2efPWOT

ハロワに行け

117：魔王軍親衛隊 2017/8/29 12:01:59

ID：HmzBVT22af

最近飛鳥様が笑うこと多くて俺氏につこり……

118 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 12 : 06 : 40
ID : oD5oPWjIpx

>>117
こいつ…：死んでるじゃねえか！

119 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 12 : 11 : 09
ID : c06Yk0MidY

>>117
またソウルジェム落としたのか!!

120 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 12 : 15 : 17
ID : x3cnomIYX

でも分かる最初期の方はほとんど笑ってないもんな
その時の好みだけど今はもつと好きだわ

121 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 12 : 19 : 32
ID : SOW7dbexMq

秃同

122 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 12 : 22 : 46
ID : lNbxH029Yn

俺氏超レア表情見たことあるわ

123 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 12 : 28 : 42
ID : 3d2DXk8kMo

>>122
k w s k

124 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 12 : 32 : 57
ID : TIAk0ZpyTr

>>122
あく

125 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 12 : 38 : 34
ID : HAQP8duEVW

>>122
どんな表情だよ

126 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 12 : 42 : 53

ID : 1NbxH029Yn

前回のライブの途中でこっちの方見たときにすごいギョツとした
感じの顔したんだよ。なんていうか「なんているの!？」みたいな
んで俺のことかと思っただけけどどうやら俺の隣のやつ見てそう
なったらしくてさ

127 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 12 : 48 : 20

ID : ITlsexPe3D

>> 126 お前のわけねーだろカス分を弁えろ

128 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 12 : 53 : 13

ID : 1NbxH029Yn

>> 127 酷い(´;Д;´)

129 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 12 : 58 : 37

ID : ITlsexPe3D

>> 128 言い過ぎたごめん

130 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 13 : 01 : 51

ID : 1NbxH029Yn

>> 129 いいよ

131 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 13 : 05 : 51

ID : sEDDVJTVSh

優しい世界

132 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 13 : 10 : 26

ID : b3GqtEJTWf

んでそいつどんな奴だったん

133 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 13 : 14 : 13

ID : 1NbxH029Yn

>> 132 コミュ障だから顔見てない。でもうちわが変な感じ
だった

「1 / 2の僕」だった気がする

134 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 13 : 20 : 05

ID : wFrcBtRF3N

なにそれ厨二病か？

1 3 5 : 魔王軍親衛隊 2 0 1 7 / 8 / 2 9 1 3 : 2 4 : 5 6
 I D : P v f v Q G V B p w
 厨二病にしても意味分からんな
 1 3 6 : 魔王軍親衛隊 2 0 1 7 / 8 / 2 9 1 3 : 2 9 : 4 4
 I D : 0 V C D B T P H I j
 厨二病の俺でも解読できないレベル
 1 3 7 : 魔王軍親衛隊 2 0 1 7 / 8 / 2 9 1 3 : 3 3 : 4 0
 I D : 3 a l H t I 9 L Y f
 >> 1 3 6 このスレには厨二病しか存在しない定期
 1 3 8 : 魔王軍親衛隊 2 0 1 7 / 8 / 2 9 1 3 : 3 7 : 1 6
 I D : l N b x H 0 2 9 Y n
 それからなんだけどきすつごく飛鳥様口元がニヤつきながらそい
 つのことチラチラ見てた
 めっちゃ可愛かったけど裏山死刑
 1 3 9 : 魔王軍親衛隊 2 0 1 7 / 8 / 2 9 1 3 : 4 1 : 0 8
 I D : r m y D S Q R t W W
 飛鳥ちゃんのニヤケ顔見れたお前も裏山死刑
 1 4 0 : 魔王軍親衛隊 2 0 1 7 / 8 / 2 9 1 3 : 4 4 : 5 9
 I D : A n i t a w b Z K l
 なにそれめっちゃ見たい
 1 4 1 : 魔王軍親衛隊 2 0 1 7 / 8 / 2 9 1 3 : 4 8 : 0 3
 I D : m W L q 6 S L k L T
 死んでもいい
 1 4 2 : 魔王軍親衛隊 2 0 1 7 / 8 / 2 9 1 3 : 5 3 : 4 7
 I D : h z e w O p W W a x
 ちよつと待ってそれもしかしてさ
 叡智の魔道士じゃね？
 1 4 3 : 魔王軍親衛隊 2 0 1 7 / 8 / 2 9 1 3 : 5 7 : 5 9
 I D : z C A q x k d R E r
 世界の謎がまた一つ解かれたか……
 1 4 4 : 魔王軍親衛隊 2 0 1 7 / 8 / 2 9 1 4 : 0 3 : 2 5

ID:iI4KOS9ppG

リアルに鳥肌たったわ

145:魔王軍親衛隊 2017/8/29 14:06:50

ID:5yAOMzeyON

魔王の右腕だと……

146:魔王軍親衛隊 2017/8/29 14:12:44

ID:T4DtfSWjvP

>>145

混同してんぞ

147:魔王軍親衛隊 2017/8/29 14:16:51

ID:B49wdPp0TI

>>145

魔王の側近または闇の姫騎士の右腕な

148:魔王軍親衛隊 2017/8/29 14:22:28

ID:oDeLsAsFYC

そーいや魔道士ってダークイルミネイト二人と仲良いんだっけ

149:魔王軍親衛隊 2017/8/29 14:27:44

ID:8LPanCqzBo

同じ中学って聞いたことある

150:魔王軍親衛隊 2017/8/29 14:33:02

ID:WNuliuKW84

男か女か、それが問題だ

151:魔王軍親衛隊 2017/8/29 14:38:48

ID:jrlOuGASRq

>>150女であるのが一番だけど男でもあの二人と付き合えるって純粹に凄いと思う

152:魔王軍親衛隊 2017/8/29 14:42:14

ID:4bYIDmwl4

俺らでもたまに二人の言ってることがわかんねー時あるもんな

153:魔王軍親衛隊 2017/8/29 14:47:57

ID:9licfeYqox

テレビに出る神崎語は全て魔道士の翻訳説すこ

154：魔王軍親衛隊 2017／8／29 14：53：19

ID：b7NtSjAArn

闇の姫騎士の右腕ってことは左腕右足左足そして頭があるってこと……？

155：魔王軍親衛隊 2017／8／29 14：58：00

ID：ADpD6PkCfC

>>154 蘭子ちゃんはエグゾディアだった……？

156：魔王軍親衛隊 2017／8／29 15：01：32

ID：Rtxv4wc45e

>>155 本人喜びそうで草

157：魔王軍親衛隊 2017／8／29 15：07：08

ID：sGVBgk0sQR

叡智の魔道士なのに右腕とは一体……ウゴゴ

158：魔王軍親衛隊 2017／8／29 15：11：46

ID：5z9UP26anX

>>157 つまり魔道士は頭と右腕二つの役割を果たす……？

159：魔王軍親衛隊 2017／8／29 15：17：25

ID：tFIKLs7WRy

>>158 もうチートや、チーターやろそんなん！

160：魔王軍親衛隊 2017／8／29 15：22：12

ID：Wqqc50UF08

蘭子ちゃんブログで魔道士のこと書いとる時ニッコニコやもんな

(妄想

161：魔王軍親衛隊 2017／8／29 15：25：18

ID：7zBPK38GFO

>>160 実際その通りそうなのが目に見える

162：魔王軍親衛隊 2017／8／29 15：29：28

ID：C4G5mWgWQS

話戻すけどじゃあ飛鳥様のライブに来たの魔道士ってことでFA

？

163 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 15 : 32 : 42
ID : 5yYoInFSI

だとしたら納得する知り合いいたらそらニヤけるわ

164 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 15 : 38 : 38

ID : PtXbjrtASk

そんな顔はしていない

165 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 29 15 : 41 : 54

ID : rnKOPtTqOM

ノーコメントで

.
. .

341 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 4 : 55 : 54
I

D : W3r1AZlMGr

蘭子ちゃんのおかげで無事に厨二病になりました！

342 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 4 : 59 : 45
I

D : gancbr6lTr

飛鳥様のおかげで厨二病に目覚めました

343 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 5 : 05 : 34
I

D : HbgewLhDcI

二人のおかげで厨二病再発した詫びにもっと歌ってくれ

344 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 5 : 10 : 21
I

D : NAWGyrp8dQ

>>341 | 343

パンデミックかな？

345 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 5 : 13 : 58
I

D : RcWnh0xw6H

>>341 | 343

ミーム汚染か

346 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 5 : 19 : 41
I

D : E s l h J l L g j A

>>>345

二人はSCPだった……?!

347 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 5 : 23 : 47 I

D : 7 a J j l W t n p U

2人がSCPだったらどんなだろ

348 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 5 : 29 : 33 I

D : U O R Q O o 4 u x r

2人ともsafeやろ

349 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 5 : 34 : 43 I

D : a o O i Y 9 B k P J

ket erやぞ誰にも止められんレベルや

350 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 5 : 38 : 56 I

D : y G T K l C e s z a

これが蘭子ちゃんの收容プロトコルだ!←

351 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 5 : 40 : 02 I

D : H A L 9 E 3 t s H 3

ブリュンヒルデ

SCP | 408 | JP

オブジェクトクラス : safe

特別收容プロトコル : SCP | 408 | JP は住居として用意された標準的なクラスBの居室に住んでいます。常に黒いゴスロリまたはそれに準じた服装を着させ、部屋にはパソコンとテレビゲーム及び漫画や小説などの娯楽を配備させましょう。彼女が歌を歌う時は必ず指示通りの色のマイクを用意し思い通りに歌わせませす。自作小説及び漫画及びポエムを見せられた際には褒めるか流すかしましょう。決して非難しないように。凄くムクれます。自作衣装を描いた際には作ってあげるととても喜びます。

352 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 5 : 47 : 42 I

D : V Z U y d 7 H V Z d

>>351下に任すなよwwwって速くね？

353：魔王軍親衛隊 2017/8/30 5:53:29 I

D:To4qT0lWhC

>>351なんだこいつww

354：魔王軍親衛隊 2017/8/30 5:59:12 I

D:rnKOPtTq0M

>>351違うもん

355：魔王軍親衛隊 2017/8/30 6:02:51 I

D:2p7XweEzJ

>>351こいつもしかして魔道士じゃねwww

356：魔王軍親衛隊 2017/8/30 6:07:25 I

D:JWtwBDIhzK

>>355ねーよって言いたいけどなんか納得するわwww

357：魔王軍親衛隊 2017/8/30 6:12:25 I

D:SrEdRyI5H

ワイも自作小説とか読んで見たいんじや

358：魔王軍親衛隊 2017/8/30 6:15:31 I

D:MP7vM45gtx

外国語並みに解読できるか不安

359：魔王軍親衛隊 2017/8/30 6:20:09 I

D:6FhwWiMYFU

>>358熊本は異国だもんな

360：魔王軍親衛隊 2017/8/30 6:23:26 I

D:E4bq4D12zP

魔道士の凄さが一段と分かるスレ

361：魔王軍親衛隊 2017/8/30 6:27:08 I

D:8NOVF1MFS1

じゃあ飛鳥ちゃんは？

362：魔王軍親衛隊 2017/8/30 6:30:59 I

D:UfopJDBWfd

飛鳥様の収容プロトコルはこれだ！←

363 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 6 : 35 : 48 I
D : HAL9E3tsh3

1 / 2 のボク

SCP | 203 | JP

オブジェクトクラス : Euclid

特別收容プロトコル : SCP | 203 | JP は街の景色が見える窓の付いた一室に收容されています。部屋には広い机とホワイトボードと大きなベッドを用意し、娯楽などを必要とする場合は用意しましょう。SCP | 203 | JP は夜景や夜明け、黄昏時の夕日を好みますので自由に見られるように窓の配置には十分配慮しましょう。低血圧ですので朝方に起こすのはやめ、用事がある際は事前に言い目覚まし時計で起こしましょう。(その際目覚まし時計では起きませんので直接起こしてください)

SCP | 203 | JP が変な問いかけをして来た場合は無視しないよう必ず返答しましょう。この際聞き返す、話をそらすといったことはしないように、マジレスするか乗ってあげましょう。

例 : 1

「今日は……風が騒がしいね」

「台風だからな」

364 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 6 : 39 : 55 I

D : vAIOGBetmU

>> 363 だからお前は何者なんだ

365 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 6 : 44 : 03 I

D : sdbWbkV2qS

>> 363 本当に魔道士か!?

366 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 6 : 47 : 51 I

D : 6zZQXlclSP

>> 363 妙に具体的すぎない?

367 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 6 : 53 : 03 I

D : PtbjrtASk

>> 363 屋上

368 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 6 : 57 : 09 I
 D : r n K 0 P t T q 0 M
 >> 363 あの孤独な silhouette は : : : : : ?
 369 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 7 : 02 : 01 I
 D : R p z m 6 o D f u 4
 >> 368 動き出せば : : : : : ?
 370 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 7 : 05 : 15 I
 D : o 0 v T H v p n P 6
 >> 369 それは紛れもなく奴 : : : : : ?
 371 : コブラ 2017 / 8 / 30 7 : 09 : 44 I D : H
 A L 9 E 3 t s H 3
 もう寝ろお前ら
 372 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 7 : 13 : 07 I
 D : N V i E a T 3 E n z
 >> 371 コブラじゃねーか!
 373 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 7 : 17 : 00 I
 D : T y v C J 5 3 i B w
 >> 371 コブラじゃねーか!!
 374 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 7 : 22 : 32 I
 D : e d P e G o J b V f
 >> 371 やっぱりコブラじゃねーか!!
 375 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 7 : 26 : 23 I
 D : I T W n g b Y D 4 M
 >> 371 おやすみじゃねーか!!
 376 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 7 : 29 : 30 I
 D : d 8 i 3 G 2 C s 1 N
 >> 371 良い夢をじゃねーか!
 377 : 魔王軍親衛隊 2017 / 8 / 30 7 : 35 : 03 I
 D : q i P N I 3 i 8 i g
 >> 371 何この : : : なに?

――

ハル：おはよ……眠い

1／2のボク：やあコブラ

ブリュンヒルデ：煩わしい太陽ね！コブラ！！

ハル：コブラ言うな

ハル：昨日はサンキューな神崎

ブリュンヒルデ：私の頭脳に該当する事柄無し

1／2のボク：とりあえずキミ、今日のお昼屋上だね

ブリュンヒルデ：マグマに浸かったコカトリスの肉を

ハル：唐揚げな、了解

その後スレでは魔道士か否かを考察され続けた

少女たちと歌姫の宴

1／2のボク：今日のカラオケはなかなか興味深かったね

1／2のボク：まさかあそこまで春川くんの歌唱力が高かったなんて

ハル：からかうなよ二宮

ハル：アイドルに言われるのなんて皮肉もいいところだぞ

ブリュンヒルデ：皮肉ではなからう

ブリュンヒルデ：我もそなたの戯曲に酔い痴れていた身

ブリュンヒルデ：従者よ、どこでその芸を身につけた

ハル：好きな歌をそのまま歌っただけだ

ハル：練習なんかたまに鼻歌歌うくらいだしな

1／2のボク：それで上手くなればレッスンなんていらないね

1／2のボク：キミの歌声は見事なものだった。ボクらが証を示そう

ブリュンヒルデ：汝の歌に敬意を示そうぞ！

ハル：そこまで言われると照れる通り越して気持ち悪いぞ

1／2のボク：素直じゃないね、キミは

ブリュンヒルデ：全くである

ハル：ブーメラン刺さってんぞ

ー

その日、俺と神崎と二宮は休日が合ったのでカラオケに出向くことになったのだ。

「カラオケは初めて来たな、こんな所なのか」

「キミ、ボクたち以外に友達はいないのかい？」

失礼な奴だ、二宮にもほとんど友達などいないだろうに。

そこで笑っているお前もだぞ、神崎。

「そうは言うが、ボクらには事務所の仲間たちもいるからね。それに

最近はキミのおかげでボクらに話しかけてくれる人も増えて来たもののさ」

「左様。孤高の存在として謳われた我だが、崇められるのも悪くはない」

「可愛がられるの間違いだろ」

「むうう!!」

ポカポカと神崎の攻撃を流しながら、さして歌うかとマイクを持つ。

「…………どうやって曲を入れるんだ？」

「キミは本当に来た事がないんだね。仕方ない、最初はボクらが歌おう。これを使うんだ」

そう言つて二宮は妙に大きなパッドを持つて来た。それを慣れたような手つきで扱い、しばらくして曲目が入る。

『nameless survivor』…………誰の曲だ？」

「岸田教団つていうロックバンドの曲さ。…………ああ、どうせなら

採点も入れようか。自身を磨くためには必須だからね」

「む、評が付けられるか。であれば我も我が魔力を用いて本気で行かねばならぬな」

「おいおい、勘弁してくれよ…………」

そうして曲が始まる。

歌っている二宮を見ると、かなりこの曲には思い入れがあるらしく真剣で、その歌声に惹かれてしまう。

「…………なんとというか、二宮のためだけにあるような曲だな」

「然り。詞に写る意味は存在論者の叫びそのもの。おそらくそこで共鳴しあっているのであらう」

「あいつらしいっちゃあいつらしい」

二宮が叫ぶ意思。

自身の存在証明とは言うけれど、俺だつて自分の存在証明など知りもしないし考えもしなかった。

ただ流されて生きてきて、これからも流されて生きていくのだらう。

『だったらキミはボクがどこにいても何をしても、【ボク】を見つけてくれるのかい?』

そう聞かれた時、俺はなんて答えただろうか。
今ならなんて答えてやれるだろうか。

『キミはボクの言葉を聞いても距離を取らないんだね。みんながボクを面倒な奴だとか痛い奴だって言うのに。キミもその一人で、流されるタイプだと思ってたよ』

その時は、なんとなく流れが気に食わなかったんだ。

それだけのことだった。

曲が終わりを迎える。

二宮が満足そうにマイクを下ろしていく。

「どうだい?」

「……お前らしい曲だったよ」

「それだけかい? 皮肉を混ぜたり歯の浮くようなセリフを吐かないなんて、キミらしくもないね」

「従者は歌声に耳を傾けるのに必死であつたぞ。凄まじく集中しておつたな」

「やかましい」

否定の言葉は出ない。実際その通りだ。

俺の様子を見て、二宮が誇らしげにニツと笑う。そして俺の耳元に口を近づけ、小声で呟いた。

「安心しなよ。もうあの頃のボクじゃないさ。キミに居場所を強要したりしない」

「……………」

それだけ呟くと二宮は俺から離れ、神崎にマイクを渡す。

「むう、何の話であるか?」

「何でもないさ。ただの遠い昔の話。さあ、次はキミだよ蘭子」

「うむ……まあ追求の手は伸ばさぬようにしよう」

蘭子の入れた曲は……『色彩』？

「Fate／Grand Orderの主題歌だね。ボクも彼女も結構やってるんだ」

「Fateか、前に勧められたな。少し見たが確かに神崎は好きそうだ」

そういう意味では神崎らしい曲だ。

少し独特なメロディが鳴り響き、神崎が歌い出す。音程の取りにくそうな曲だが、あいつにはそんなもの関係がなかった。

「やっぱり上手いな、神崎は。歌の神崎に舞の二宮ってどこか？」

「歌も負けるつもりはないけどね」

『我は孤高の魔王であり、傷ついた悪姫ブリュンヒルデ。それで良い……良いのだ』

懐かしい幻聴だ。今でもあの光景は瞼に宿っている。

神崎は二宮に会う前、俺が遭遇した最初の厨二病患者であり、変人であり、一人ぼっちの女の子だった。

理解されないと分かっているも自身を貫き通した、寂しがり屋の少女。

「だから放っておけなかったのかい？」

「……顔に出てたか？」

「君は理解りやすいからね。蘭子を見る目がまるで父親のようだったよ」

意地悪そうに微笑む二宮を尻目に、俺は黙って神崎の歌に耳を傾ける。

『汝は我が従者、我が眷属、そして――私のはじめてのお友達になってくれるの？』

あの日、俺と神崎が友達になった日。

あの頃から何かが変わった気がするんだ。

あいつは俺が自分の環境を変えてくれたと思っただろうけど、それだけじゃない。俺もあいつに影響されてるのかもしれない。

神崎の歌が終わる。二宮の手を叩く音で我に帰った。

「従者よ、どうであったか！」

「良かったよ。綺麗だった」

「そ、そう？ ……えへへ」

神崎は照れたように笑って、誤魔化すように飲み物に手をつけた。

「お熱いところ申し訳ないが、キミの出番だよ春川くん」

妙に不機嫌そうな目で二宮が俺にパッドを渡してくる。

よく分からないが、さて、何を歌うかー

「……『vivi』か。好きなのかい？」

「この前お前と見に行った映画でこの人の曲が気に入ってな。それで調べて聞いたんだ」

「へえ、キミの趣味に影響を与えられたなんて光栄だね」

「お前らと一緒にいたら嫌でも染まるさ」

イントロが始まる。

マイクを持って、俺はぎこちなくも歌い始めた。

――

驚いた、と素直に告げよう。

彼が歌ったところをボクらは聞いたことはなかったが、まさかここまで上手いとは思わなかった。完全な予想外、それこそ歌手を目指せるんじゃないか？

「す、すごいね！ 春川くん！」

「蘭子、ペルソナが剥がれてるよ。でもまあ、確かにすごい」

蘭子の口調が崩れるのも無理はない。本当にカラオケ初心者かと疑いたくなるくらい、彼の歌はブレなく、真に迫っていた。

彼の歌がボクの心の中に這入ってくる。

湧き上がるのは、なぜだか分からないけれど、どうしようもない焦燥感。

理由もなく、耳を塞ぎたくなってしまおう。

「蘭子」

「……なあに？」

「……………」

「……大丈夫だよ、飛鳥ちゃん。飛鳥ちゃんが何を怖がっているのか、よく分からないけど、きつとなんとかなる……ううん、なんとかしてくれると思うよ、春川くん」

何も言っていないのに見透かされている気がした。存外、彼女もボクと同じように恐れを抱いているのかもしれない。

ボクたちはアイドルで、彼は男の友達。

彼と付き合えるのは、今はまだボクらが駆け出しだから。

アイドルとして大成したいし、それを目標として努力しているけれど、もしそうなって仕舞えばその時は――

――果たして彼はボクらの隣に、存在しているのだろうか。

少女とグダツと 蘭子編

ハル：【急募】FGO始めたんだけど何からしていいか分からん
ブリュンヒルデ：序章は幕を下ろしたか？

ハル：十連は引いた

ブリュンヒルデ：ふむ、如何なるサーヴァントが汝の下に訪れたか
ハル：イリヤつてのが出た

ハル：こいつサーヴァントじゃなくて本編の敵キャラじゃなかったか？

ブリュンヒルデ：いーないーな！

ブリュンヒルデ：であるが、ううむ

ブリュンヒルデ：魔術師であればこの先辛いかもしれぬ

ブリュンヒルデ：育てるに越した事はないが

ハル：あーなんか聞いたわ

ハル：ワイバーン地獄だっけ

ブリュンヒルデ：我が盟友となり下僕の者を遣わそう

ブリュンヒルデ：悪鬼羅刹の悪名を持つ暴虐の化身

ブリュンヒルデ：酒吞童子をな

ハル：サンキュー

ハル：とりあえずストーリーを進めればいいのか？

ブリュンヒルデ：うむ、物語を進め召喚の炉を回すが良い

ブリュンヒルデ：出来ることなら三十の星々をつぎ込むと良いぞ

ブリュンヒルデ：序盤は盟友に頼り己は育成に励むと良い

ハル：マシユって育てたほうがいいんだっけ

ブリュンヒルデ：六章まではどちらでも構わぬ

ブリュンヒルデ：無論育てて損は決して無いが、まずは火力の確保を先決とせよ

ブリュンヒルデ：バーサーカーがお勧めであるが最終的には因縁であるため

ハル：ガチャを回せ、か

ハル：了解、まあやってみる
ブリュンヒルデ：うむ、世界を救ってくるといい！

ブリュンヒルデ：従者よ

ブリュンヒルデ：我、救援を必要とす

ハル：なんだ

ブリュンヒルデ：死霊使いに捕縛され

ブリュンヒルデ：ネクロノミコンの教典の一部を焼き付けられてい
る

ブリュンヒルデ：このままでは邪悪な力に支配されてしまう

ハル：魔王が甘ったれてんじゃねえ

ブリュンヒルデ：たすけて

ブリュンヒルデ：おねがい

ハル：何をすればいい？

ブリュンヒルデ：………どうしよう

ハル：て言うか死霊使いつて誰で今どこにいるんだよ

ブリュンヒルデ：小梅ちゃんの部屋

ハル：白坂小梅か

ハル：俺からは何も出来そうに無いな

ブリュンヒルデ：我に闇に染まれと言うか!?

ハル：さすがにアイドルの寮には入れねえよ

ハル：殺されるわ

ブリュンヒルデ：ぬ、ぬうううう

ハル：あー

ハル：だったら終わったら迎えに行つてやるからうちに来い

ハル：一緒にゲームでもしようぜ

ブリュンヒルデ：………帰りも送ってくれる？

ハル：当たり前だ

ハル：どうする

ブリュンヒルデ：行く

ハル：じゃあ頑張れよ

ブリュンヒルデ：うん

ブリュンヒルデ：やっぱりむうーりいー!!!
ハル：オ!!

そのあと流石に家には泊まらなかったけれど飛鳥のヘルプが来る
まで離れなかったそうなの……

少女とグダツと 飛鳥編

1 / 2のボク：例えば、だけれど

1 / 2のボク：もし何の作為もなく、目的もなく、ただ歩いているだけでボクらが合流したら

1 / 2のボク：それは運命の選択と言えるんじゃないかな

ハル：……

ハル：それはつまり偶然同じ街にいるから一緒に遊びましょうっていう

ハル：デートのお誘いと思っただけなのか？

1 / 2のボク：キミがそう思うんならボクはそれでも良いんだけどね

1 / 2のボク：そうだな、ボクのいるところが分かっていたらそのまま逢瀬のひと時を楽しむのもいいと思うよ

1 / 2のボク：無論、ボクの居場所が分かればの話だけどね

ハル：オーケー

ハル：その挑戦受けて立とう

ハル：今更デートはなしは無しだぞ

1 / 2のボク：もちろん、誘ったのはボクだ

1 / 2のボク：望むところだね

1 / 2のボク：ヒントはいくつまであげればいいんだい？

ハル：バカにすんな

ハル：すぐに見つける

1 / 2のボク：30分経過だ

1 / 2のボク：催促するのも無粋だとは思いますが、ボクにも都合はある

1 / 2のボク：門限までには帰らないといけないしね

ハル：探してる最中だ

ハル：退屈だとは思いますが待つてろ

1 / 2のボク：退屈だなんてそんな

1 / 2のボク：キミがいつここに辿り着くのが楽しみで退屈なんて感じられないよ

ハル：言ってる

ハル：こちらら普通の男の子なんだ

ハル：女子とのデート権をみすみす見逃すかよ

1 / 2のボク：キミ、推しは文香さんじゃなかったかい？

ハル：ふみふみは女神だから

1 / 2のボク：1時間経過

1 / 2のボク：ほらほら、ヒントが欲しいんじゃないかい？

1 / 2のボク：意地を張ってる暇ないんじゃないかな

ハル：意地があるのさ男の子には！

1 / 2のボク：あともう少しで家に行くよ

1 / 2のボク：デートと言ってもとても短そうだね

ハル：お前移動してないだろうな！

1 / 2のボク：先に言ったと思うけれど

1 / 2のボク：ただ歩いているだけで合流出来たらと言ってるじゃないか

1 / 2のボク：あとはキミのご想像にお任せしよう

ハル：絶対見つけてやる

1 / 2のボク：1時間半経過

1 / 2のボク：もう限界かい？

1 / 2のボク：春川くん？

1 / 2のボク：応答無し、か

「まあ、仕方ないけどね」……つと

スマホを操作し、送信しようと画面を押そうとしたところで影が差

した。

ゆつくりと顔を上げる。そこには息も絶え絶えの待ち人の姿があった。

「よく分かったね」

「そーいやあつて思ったんだ、お前は一言も俺と同じ街にいるとは言ってねえなつて」

ボクの居場所はキミの家の前。

あーら反則。何の作為も言ったけれどあれは嘘だ。

作為はあつた。

ただしイジワル問題というね。

「それからもう少して家に行くよつて言つてたからな。大ヒント過ぎてナメてんのかつて思つたぜ」

「キミが遅いのが悪い。さ、部屋に上げてくれ。今日は何だか……冷える」

「自業自得だろアホ。何か嫌なことでもあつたのか知らんが、今日はどことん遊ぶぞ」

そう言つて玄関へと歩いて行く彼の背中は何故だかすごく大きく見えた。

どうしても綻んでしまう口元を隠しながら、ボクもその後が続く。

あー今日も夕日がとても綺麗だ。

あといつまで、ここからの夕日が見れるのか。

ボクはそれを、数えたくはなかつた。

42期二年四組裏掲示板62スレ目

577 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 9 23 : 57 : 3

0 ID : QvGEMLRQWS

今日の蘭子さんも可愛かったー

でも春川と話してる時の蘭子ちゃんめっちゃ可愛いんだよね

578 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 0 : 01 : 5

3 ID : T4kAz85Xem

今日の飛鳥くんもかつこよかったー

でも春川くんと話してる時の飛鳥くんギャップ萌えなのよね

579 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 0 : 05 : 4

7 ID : 9c1H84NqAn

>>577 | 578 春川許さん

580 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 0 : 11 : 3

8 ID : Ci4ydXeuY4

>>577 | 578 春川絶許

581 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 0 : 15 : 1

4 ID : 5wR3JS08Wj

でも春川くんのおかげで二人とも取つつきやすくなったっていう

か仲良くなれたというか

582 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 0 : 19 : 3

3 ID : gILOuN1YK2

春川の翻訳のおかげで俺も熊本弁が分かるようになったしな

583 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 0 : 23 : 3

3 ID : plHdopZWBb

バイリンガルとしての能力がなければ今頃……うござい

584 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 0 : 28 : 0

5 ID : uNM7ZM6K7P

二宮コミュニケーション方法が確立されている今あいつはもはや

不要

585 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 0 : 31 : 4

7 ID:38br98hrU

>>584春川不要説出たか？

586:名無しの生徒諸君 2017/10/10 0:36:2

0 ID:5M3e1XodXK

そろそろ我ら四天王が動き出す時が来たか……

587:名無しの生徒諸君 2017/10/10 0:40:1

1 ID:VKWAELv9

イかれたメンバーを紹介するぜ!!

588:名無しの生徒諸君 2017/10/10 0:43:3

0 ID:Inq0MK8CbW

>>587メンバー誰だよ

589:名無しの生徒諸君 2017/10/10 0:48:2

9 ID:fM908Fi9EM

>>588春川とか……？

590:名無しの生徒諸君 2017/10/10 0:53:2

0 ID:ZCiGIAn1wQ

あいつはイかれてる間違いない

591:名無しの生徒諸君 2017/10/10 0:56:4

7 ID:MPTextex5a4

春川全盛期伝説

・神崎語翻訳は当たり前、二宮語録も

・初回厨二病パーフェクトコミュニケーションを頻発

・春川にとつての厨二病患者は神崎蘭子のなり損ない

・二宮語録誕生も日常茶飯事

・神崎語を誰も理解していない中、一人でパーフェクトコミュニ

ケーション

・熊本弁は外国語に聞こえる

・ペン回しで二宮を感じさせる

・怒ると神崎が普通の言葉を喋った、泣いて謝る二宮も

・他人が翻訳したものが気に入らなければ処分

・あまりに仲良いから喧嘩しても仲が良い

- ・その喧嘩も夫婦喧嘩
 - ・神崎を撫でてでも普通に喋らせる
 - ・二人と会えない日でも落ち込まない
 - ・ライブ当日の時も授業放って駆けつけた
 - ・言葉を交わさずとも目で会話できる
 - ・二宮語録を普通の言葉に翻訳して神崎語に再翻訳
 - ・あれはメラゾーマではない、メラだ
 - ・風が騒がしい時は大体こいつのせい
- 592：名無しの生徒諸君 2017/10/10 0:59:5
- 6 ID：n1TxJ8Lza3
- いつ見てもあながち間違いじゃないのがすげえな
- 593：名無しの生徒諸君 2017/10/10 1:04:0
- 8 ID：YzMuF8Ln61
- こいつ本当に人間か？
- 594：名無しの生徒諸君 2017/10/10 1:08:4
- 5 ID：ouuJQJYqA4
- 化け物を殺すのはいつだって人間だ
- 595：名無しの生徒諸君 2017/10/10 1:11:5
- 6 ID：fhCoIXeh5G
- >>594 春川は吸血鬼だった……？
- 596：名無しの生徒諸君 2017/10/10 1:15:5
- 4 ID：Rd20YM9tWo
- 実際春川ってすげえ良いやつなんだよな
- 597：名無しの生徒諸君 2017/10/10 1:20:5
- 4 ID：wjMZSrOukl
- 宿題見せてくれるし
- 598：名無しの生徒諸君 2017/10/10 1:26:1
- 7 ID：dF7X0pFgJx
- なんかあったら手伝ってくれるし
- 599：名無しの生徒諸君 2017/10/10 1:29:5
- 2 ID：f0OXyMlagr

普通に見れる顔だし

600 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 1 : 35 : 4

3 ID : h o t C k I e P D i

分かるブサイクじゃないよねイケメンでもないけど

601 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 1 : 38 : 5

5 ID : r t G e v o Y O T C

でも神崎と二宮を侍らせてるって言ったら？

602 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 1 : 42 : 4

3 ID : a f z v o r C z F l

>>601ギルティ

603 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 1 : 47 : 5

1 ID : y 2 k D t V Q 4 g 3

>>601ギルティ

604 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 1 : 53 : 2

7 ID : A V V a n p z V 6 9

>>601死刑

605 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 1 : 57 : 1

0 ID : z d U p x 2 p d O t

>>601磔&鞭打ち

606 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 2 : 02 : 4

6 ID : 3 f i k D f Y k U l

>>601毎日あいつの靴に画鋏が入る呪いをかけた

607 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 2 : 06 : 5

6 ID : W K M J c r 9 y F v

でもあいつがいなくなったら多分二人が悲しむ……

608 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 2 : 12 : 0

6 ID : P R K L k 5 A 6 Y W

>>607ホイミ

609 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 2 : 16 : 1

2 ID : r r B I z 4 U g g e

>>607ベホイミ

610 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 2 : 21 : 1
 1 ID : G5ifDgYUq5
 >> 607ベホイマ
 611 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 2 : 26 : 5
 9 ID : gUxlcdnaxk
 >> 607ベホイム
 612 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 2 : 32 : 4
 2 ID : h387yy8B7b
 >> 607ベホマ
 613 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 2 : 36 : 3
 5 ID : UBD043t7AT
 >> 607ザオ
 614 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 2 : 42 : 3
 0 ID : JanDs8FGBD
 >> 607ザオラル
 615 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 2 : 46 : 2
 4 ID : sLDWydV7MS
 >> 607ザオリク
 616 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 2 : 52 : 2
 2 ID : Ha9AveWxhY
 >> 607マダンテ
 617 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 2 : 56 : 3
 3 ID : lVioOavj6u
 >> 616おいこいつ異常者だぞ!!
 618 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 3 : 01 : 3
 9 ID : hQUGr3fHep
 >> 616親衛隊出動!! 見つけ次第殺せ!!
 619 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 3 : 06 : 0
 7 ID : NOtwbGFIZu
 とりあえず今の状況は保留?
 620 : 名無しの生徒諸君 2017 / 10 / 10 3 : 09 : 1

8 ID:h j l K V o H c i 5
ぶつちやけ二人が笑顔なら無問題

6 2 1 : 名無しの生徒諸君 2 0 1 7 / 1 0 / 1 0 3 : 1 4 : 2
8 ID:c 5 f W k s H M W P
春川が話しかける前には戻って欲しくないしな今が一番

6 2 2 : 名無しの生徒諸君 2 0 1 7 / 1 0 / 1 0 3 : 1 8 : 1
7 ID:2 Y g l C D D X g j
>>6 0 7 ニフラム

6 2 3 : 名無しの生徒諸君 2 0 1 7 / 1 0 / 1 0 3 : 2 2 : 2
9 ID:D d z l h J j 5 F s
>>6 2 2 少なくとも遅いお前よりはレベルが上だから効かないぞ

6 2 4 : 名無しの生徒諸君 2 0 1 7 / 1 0 / 1 0 3 : 2 5 : 5
8 ID:E 6 P R z B P h M b
そういえば春川が神崎さんのブログでファンから魔道士って言われてるの草

6 2 5 : 名無しの生徒諸君 2 0 1 7 / 1 0 / 1 0 3 : 2 9 : 4
5 ID:I d b p f O M T 2 v
神崎さんから魔道士として広められてるのマジウケる

6 2 6 : 名無しの生徒諸君 2 0 1 7 / 1 0 / 1 0 3 : 3 4 : 2
1 ID:6 C W O M X w I k t
飛鳥くんのブログでも共犯者とか観測者って言われてるらしいよ

6 2 7 : 名無しの生徒諸君 2 0 1 7 / 1 0 / 1 0 3 : 3 8 : 5
7 ID:s g b W C S b y R W
>>6 2 6 なにそれ羨ましい

6 2 8 : 名無しの生徒諸君 2 0 1 7 / 1 0 / 1 0 3 : 4 4 : 3
0 ID:R l 3 7 7 0 j 0 I B
>>6 2 4 >>6 2 6 ファンから認められてるとかマジパネエ

6 2 9 : 名無しの生徒諸君 2 0 1 7 / 1 0 / 1 0 3 : 4 9 : 4
2 ID:u 0 6 4 K v d J R 9
また一つ伝説が生まれてしまったか……

ハル：そういえば最近クラスの奴らがすげえ殺気と暖かな目を向けられるんだけど何か知ってる？

1 / 2のボク：さあ……

1 / 2のボク：心当たりはないね

ブリュンヒルデ：我が軍団の中に刺客を紛れ込んでいると!?

ハル：刺客か……

1 / 2のボク：どうかしたかい？

ハル：なんでもねー

ハル：んじやおやすみ

ハル：明日は家庭科で調理実習だぞ。来るんなら準備しとけよ

ブリュンヒルデ：我が錬金術で至高の料理を精製しようぞ！

1 / 2のボク：料理はあまり得意ではないんだが……

1 / 2のボク：春川くんが教えてくれるんだよね？

ハル：俺もあんまり上手くないけどな

ハル：一応同じ班にしていたからまあ毒味はできるぞ

1 / 2のボク：失礼な話だが……否定はできないな

ブリュンヒルデ：では我はそろそろ眠らせてもらおう

ブリュンヒルデ：深淵の誘いを！

1 / 2のボク：おやすみ、また今日に

ハル：おお、おやすみ

調理実習では特に美味しくもない料理にクラス全員が並んだとか

少女たちと14歳①

ブリュンヒルデ：立ち込める暗雲の空ね！

1／2のボク：おはよう

博士：もう朝か……

博士：ああおはよう、そしておやすみ

カワイイ天使：おはようございます！

カワイイ天使：晶葉さん、また徹夜ですか？

カワイイ天使：ダメですよ、お肌に悪いんですから！

カワイイ天使：クマとか作ったらまたプロデューサーさんに怒られますよ！

博士：仕方ないだろう

博士：もうすぐ新しい発明品が完成するんだ

1／2のボク：今回は合作だったね

博士：うむ、助手が以前から欲しいと言っていた物だな

博士：私もロボット開発に進歩をもたらすと思い採用した

ブリュンヒルデ：そなたの右腕とは如何なる人物か？

博士：幼稚園からの幼馴染だな

博士：中学では離れてしまったが今でもたまに会っては発明について話し合っている

博士：ふむ、そういうえば蘭子と飛鳥の中学と同じだったな

1／2のボク：そうなのかい？

1／2のボク：もしかしたらすれ違っている可能性もあるかもね

ブリュンヒルデ：我が従者に聞けば分かるかもしれぬ

ブリュンヒルデ：特徴などはあるだろうか

博士：ふむ……特徴か

博士：特徴なあ……ないな

カワイイ天使：ないんですか!?

博士：強いて言うなら……ううむ

博士：ロボットが好きだ

カワイイ天使：外見的特徴じゃないんですか!?

博士：イケメンではない

カワイイ天使：辛辣う!

カワイイ天使：ていうか男の人だったんですか

カワイイ天使：気をつけなくちゃダメですよ、どんなことでファン
の人を裏切るか分からないのですから

博士：抜かりはない

博士：いざとなればこのペン型記憶消去装置で……な

カワイイ天使：MIB!?

カワイイ天使：晶葉さん黒服の仲間だったんですか!?

博士：おっと

博士：ふふ私なりのジョークだ

博士：幸子くん、少し用事があるので私の研究室に来たまえ

カワイイ天使：いやー!

カワイイ天使：カワイイボクの記憶がけーさーれーるー!!

1／2のボク：今日も元気だね

ブリュンヒルデ：全くである

1／2のボク：それで?

1／2のボク：他にはまだ何かないのかい?

博士：むむむ……

博士：ああ、最近なんか通訳をしているようだ

ブリュンヒルデ：む……??

1／2のボク：は

博士：すまないが私もう眠気を抑えられそうにないのでな

博士：ではおやすみ

カワイイ天使：おやすみなさい晶葉さん

カワイイ天使：どうかしたのですか蘭子さん、飛鳥さん

ブリュンヒルデ：……何故だろうか

ブリュンヒルデ：我が魔力が反応したような気がするのだが

1／2のボク：奇遇だね

1／2のボク：ボクもデジヤビユを感じているよ
カワイイ天使：よく分かりませんがボクはもうそろそろお仕事な
で落ちますね

カワイイ天使：今日もみなさん頑張りましたよ！

1／2のボク：ああ、いつてらっしやい幸子

ブリュンヒルデ：武運ある旅立ちを!!

S A N A：おっはー

S A N A：事務所に今から行くんだけど誰かいる？

ブリュンヒルデ：我は未だ魔力の補充を行なっている

ブリュンヒルデ：汝の口にする魔力の素を聞こう

S A N A：あ、ありがと。じゃああたしリンゴジュースで

ブリュンヒルデ：その願いを聞き届けた！

S A N A：あ、そーだ蘭子ちゃん

S A N A：ゲーム何か持ってきてる？

ブリュンヒルデ：V I T Aがあるよ

S A N A：ソフトは？

ブリュンヒルデ：自由を求める永遠の聖戦

S A N A：凄いとこ攻めるねえ

S A N A：フリーダムウォーズはあたしも持つてるけど

ブリュンヒルデ：難航している

S A N A：難しいもんねえ

S A N A：仲間のA Iと復活時間はどうにもならなかったのかな

ブリュンヒルデ：武器改造の度に待機時間はどうかと……

S A N A：んじゃそれ持つてくから

S A N A：協力プレイしよ

ブリュンヒルデ：うん！

S A N A：そういえば

S A N A：春川くんだっけ

ブリュンヒルデ：我が従者がどうした？

S A N A：この前また対戦したんだよね

ブリュンヒルデ：永遠の仇敵と言っていたが
ブリュンヒルデ：戦績はどれくらいなのだ？

SANA：今のところ31戦17勝14敗かな

SANA：結構ギリギリな勝負だけだね

ブリュンヒルデ：結構な戦闘数なのだな

SANA：まあHALと戦うためにあのゲーセン通ってるのもある
けどね

ブリュンヒルデ：絆の線は交わさぬのか？

SANA：んー

SANA：たまーに会ってたまーに戦うのが良いんだよね

SANA：何ていうか、ここで会ったが百年目!!

SANA：的な

ブリュンヒルデ：運命の宿敵というわけね

SANA：かもね

SANA：俺より強い奴に会いに行くも楽しいけど

SANA：拮抗した実力を高め合う今の関係がちょうど良いのかも

SANA：もうすぐ着くよー

ブリュンヒルデ：うむ、待っているぞ!!

少年少女たちの夏休み

『今流行りのアイドルユニットであるダークイルミネイトのお二人をゲストにお呼びしましたー!!』

テレビの向こうに映る彼女たちは、どう形容すれば良いか……まるで友人である彼女のドツペルゲンガーという錯覚を感じた。

客観的に見て、これは現実逃避だ。

自分の友達が誰だったか分からなくなるなんてのは、酷くもどかしくなる。

『ダークイルミネイトのメンバーである二宮飛鳥さんと神崎蘭子さんはどちらも中学二年生なんですよね』

『ええ、まさに世間で言うところの中二病真っ只中です。いつも友人などに迷惑をかけてる自信があります』

『私も良き友に恵まれていると感じている。万の感謝を以つても足らぬであろう』

『飛鳥さんにとって、中二病というのはどういうものなのでしょう?』

二宮にとっては強がりだ。

『強がり……ですかね。意地というか、納得できないものがあつたら、虚勢を張り続けています』

『なるほど……蘭子さんはどうでしょうか?』

神崎は、ファイルターかな。

『我……えと、私は……その、会話があまり得意ではなくて……き、緊張してしまうのですが……』

『蘭子、大丈夫だよ。頑張つて』

『う、うん。あの……キャラになりきって話すと緊張しなくなるので……うーこうして、高貴なる闇の魔力で自身を護っているのだ』

『な、なるほど……ありがとうございました』

司会の人少し引き気味に切り上げ、そして曲紹介へと移り、彼女たちのステージが始まる。

彼女たちのユニット初曲である【双翼の独奏歌】は万人受けではないものの、一度聞けば彼女たちの曲であるとすぐに分かる曲だ。

歌詞、ダンスの振り付けは共にそれ相応のファンタジー性を伴っており、聞けば見れば、それほど味を出してくる。

机の上に広げている雑誌に目を移す。

『墮天使降臨?! 黒い翼を生やした少女たち』という見出しで大きく見開きを飾り、後のページでかなりの量の文字数であるインタビュー記事が載った今週号だ。

これはツテでゲットした物で、今本屋に行けばすでに完売しているだろう。

「……夏休みなのに、大変な奴らだな」

俺は家でゴロゴロとできる休日の毎日。

片や休みのおかげで仕事が増え毎日引つ張りだこである彼女たち。
焦燥感。

黒い煙が胸を燻る。

「ーゲホツゲホ!」

違うこれ物理的に辺りに黒い煙が立ち込めてる!!

「火事!」

焦げ臭さと夏の温度だけじゃない熱さを肌を感じる。

目眩でパニックになりながらも火事場の馬鹿力か人生で一番の俊足を見せた俺の足が玄関までたどり着き、そのまま外に飛び出た。

「はあっ……はあっ! なんだよちくしょう!!」

見ると、火事なのはウチではなく隣の家で、その火が俺の家に燃え移っている。

すぐさま消防車と思ったが、急いで出たためスマホを家の中に置いてきていた。ついでに雑誌は何故か手に握りしめていたままだった。

そんなに大事か、それが。

その選択は、おそらく本心なのだろうけれど。

遠くでサイレンの音が聞こえる。

騒音が小さくなっていき、俺は一人そこに座り込んだ。

ふと少しの笑みが浮かんでくる。

「……遠くなったんだから、どっちでも同じだろ」

その言葉の意味は自分でも分からなかったけれど、何故か胸にストンと落ちた。

めのまえが まっくらになったー

救急車に運ばれるほどの怪我は負っていなかったのですが、そのまま警察に事情聴取された。隣の火なので、俺からは事実確認だけだった。カツ井はなかった。

保護者に連絡はつかない。

父親も母親もとうの昔にいない。いるのはただ一人、一番疎遠になりたいたい姉貴がいるだけだ。

断腸の思いで姉貴の連絡先を警察に教え、そして仕事でデスマーチの真っ最中であろう姉貴に連絡が行き渡った。

姉貴はただ一言ー

「うちに来て」

それだけを俺に伝えた。

中学二年の夏休み序盤。

最悪の運を引いちまった。

家が火事になったことは前兆に過ぎない。

まだネカフェに泊まった方がマシとさえ思う。

とあるビルの前に俺は立っている。

来た回数は少なく、中に入ったことは一度もないその場所は、俺にとって地獄の門そのものだった。

中から姉貴が出てくる。

「……災難だったね」

「今からな」

姉貴の名札にはこう書かれている。

『千川ちひろ』

ここ346プロダクションの事務員で、そこに勤めている二宮や神崎のプロデューサーである人物の嫁。
またの名を、春川ちひろだ。

AIは考えることをやめない

最初に存在を認識したのは……あー、確か小学三年生の夏休み明けだな。

夏休みの課題で自由工作ってものがあつたんだ。

みんなが小学生らしいものを作っていた中、私は初期構想あたりのウサちゃんロボを作っていた。

その時はまだウサちゃんロボなんて名前はついてなくてな、無機質な飾り気のないロボットだったんだ。

で、まあ自分で言うのもなんだが天才なんでな、小学生らしくもない自由工作をして持ってきて、先生に褒められまくつたんだ。そうだな、正直に言えば嬉しかったよ。

でも周りには私が作ったのだと信じる者の方が少なかった。いなかった、とも言えるな。一人を除いて……言わなくても分かるな。

とにかく嫉妬とか、やつかみを受けた。子どもというのは手加減がなくてな、大人に作ってもらっただろだの、それを盗んできただの、不正だの、盗人だの……まあそんなあたりだ。

私もその時は子どもだった……今でもだが。

とにかく、意地っ張りはその時からあつたし、同級生に反発していった。それでもやっぱり味方はまだいなかったから、泣きながら違うとしか言えなくて……最終的にはロボットを壊されかけたんだ。

それを……あいつが守ってくれた。あの時の顔を今でも思い出せるよ。最も、思い出せない顔などないが、天才だからな。

あいつは心底面倒そうな顔をして、こう言った。

それはアウトだ、とな。

みんなが訳わからないと言った顔をして、一斉にあいつを責め立てた。私も一緒にな。だがあいつは怯むこともなく私の前に立ち、「だから何だ」と言った。

「たがが宿題だろ、これの出来はすげえけどそれでお前らの成績が下がる訳じゃねえじゃねえか」、酷く利己主義なやつだなとは思った。

でも相手はまだ小学生の子供で、理屈なんか通じない相手だったから対立が起きた。イジメのようなものも始まった。

あいつは……それから最後まで私のそばにいてくれた。理由を聞くと、「ロマンを感じた。俺にはそれが必要なんだ」と言っていた。初めは理解できなかったけど、あいつと遊び始めてからゲームと一緒に遊び始めてな。

アーマード・コア……懐かしいな。

私とあいつの求めているロボット像は違うけれど、それでもロボットが好きだという思いは同じだった。そこに可能性を感じていたんだ。

それから卒業まで私たちは一緒に遊び続けた。

ウサちゃんロボの考案もあいつからでな。初めはビジュアルなどと思っていたが、あいつが無駄に私のロボットをカッコ良くしようとしてな、私だつて女の子なんだ、可愛いのが良かったからウサギにしたんだ。

……あいつはいつも私を庇っていたし、私はあいつの背中を見るのが好きだった。同じくらいの身長なのにとっても大きく見えたんだ。

む、いや恋とかじゃないさ。あつちもそうだろう。

友愛なんだ、私たちの間にあるものは。

言っただろう？ あいつは酷く利己主義なんだ。

私はいつという楯を、あいつは私の中の可能性を信じていたから守っていただけなんだ。

卒業式の日にもう一度聞いたんだ。どうして守ってくれたのかって。

そしたらあいつ、「あれでロボット作りを止められたら困る。お前みたいなのは技術発展を起こして、ガンダムを動かして見せたりするんだよ」と言っていたな。

その時気付いた、ああこいつは馬鹿なんだって。

あいつと付き合っていくなら気をつけろよ。

利用する気で行け。私はそうしていたし、あいつもそうしていたからすぐ気楽だっただけだ。

あいつは価値のあるものには全力を以って行動を起こす究極的なエゴイストだ。だから、あいつを利用することに罪悪感はいらないんだ。

ただ……頼むからこれだけはしてくれるなよ。

必ず己を交渉材料に使うな。脅しは、あいつにとって逆効果でしかないんだから。

これくらいだよ、あいつのことは。

じゃあ、これから私は用事だ。邪魔してくれるなよ。

何って……今日は助手からお願いされたザクの発表日なんだ。

少年少女はすれ違う

問い：以下の単語から想像すべき光景を述べよ

『腐臭』

『缶ビール』

『缶ビール』

『空の缶ビール』

『膨れ上がったゴミ袋』

『生ゴミが詰まったゴミ袋』

『腐臭腐臭腐臭腐臭腐臭腐臭腐臭』

『埃を被った廊下』

『缶ビール』

『カビの生えた惣菜』

『腐臭』

答え：姉貴の自宅

この問いに正解した者は正気度チェック1d6／1d10。

「なんて考えてる場合じゃねえな……これは」

眉の寄った皺がいつまでも取れないまま、俺はその場で立ち尽くしていた。

掃除という選択をぶん投げるかのように、もはやその場所に清潔さという可能性は消え失せている。

「……しなきゃ、寝る場所も確保できないんだけどな」

つまりは掃除しろ、と。

あの姉貴は弟の俺を清掃員とでも思っているのだろうか。

真面目な話、この部屋の有様を見るにデスマーチは未だに行進中らしい。

およそ一ヶ月は家に帰っていないのだろう。

アイドルの一斉デビューは良いことばかりではないようだ。

まず換気。

腐臭を外に放出し、俺以外の誰かもこの臭いでSANAチェックしな
いかなど最低な願いが頭をよぎる。バイオハザードでウイルスを放
出した人もこんな気持ちだったのだろうか。

ゴミ袋は曜日も時間帯も合ってはいないので、嫌がらせに姉貴の部
屋に投げ込み隔離しておいた。部屋の前に消臭剤を置いたのは優し
さと言う名の結界である。

缶ビールは全部空かと思いきや中途半端に残っているものもあり、
俺の手と服が濡れたのは絶対許さない。シンクに残りを捨て、空き缶
を全て集め姉貴の扉の前に消臭剤と共にピラミッドを建てる。

カビの生えた惣菜を供え物にしようかと思ったが、さすがに臭いの
で姉貴の部屋の中に押し入れて置いた。

消臭剤と空き缶ピラミッド、そして中には無数のゴミとカビの生え
た惣菜。文字通り墓標である。合掌して満足したのでその部屋は放
置して本格的な掃除に移る。

「……掃除機はすげえ高性能なのにな」

吸引力が変わらなくても使わなければ粗大ゴミである。

掃除が終わる頃には、夜が深くなっていた。

――

SANA：どうだった？

SANA：二人

カワイイ天使：ようやく落ち着いたようです

カワイイ天使：二人ともPさんが寮まで送っていききましたよ

SANA：いきなりびっくりしたよ

SANA：事務所に帰ってくるなり泣き出すからさ

カワイイ天使：説明してもらおうにも蘭子さんはともかく飛鳥さん
まで何も言えないくらいでしたからね

カワイイ天使：何があったんでしようか……

博士：興味深い会話をしているな

博士：飛鳥と蘭子に何かあったのか

SANA：晶葉ちゃん今起きたの？

カワイイ天使：生活リズムを整えてくださいとあれほど！

博士：いや発明で集中してただけだ

博士：オフだからって何も反応しなかったのは悪かったよ

カワイイ天使：それなら良いですけど……

SANA：あの二人があんなになるなんて

カワイイ天使：何か心当たりはありませんか？

博士：ううむ……二人とは私生活ではあまり……

SANA：春川くんが何かしたのかな？

博士：む？

カワイイ天使：春川くんって誰ですか？

SANA：二人の中学の友達

SANA：かなり仲が良いみたいだよ

SANA：よくブログとかで出てくる魔道士とか観測者とか呼ばれ

てる人

SANA：ちなみにあたしの永遠のライバル

博士：……あー、春川、なんと言う？

SANA：えっと……

SANA：確か、春樹だったかな

SANA：蘭子ちゃんが言ってた気がする

カワイイ天使：蘭子さんのブログで凄く人気の人でしたね

カワイイ天使：色んな尾ひれが付いてましたけど

SANA：付けてたのが蘭子ちゃん本人というのが一番面白かった

けどね

SANA：晶葉ちゃん？

博士：用事ができた

博士：ちひろさんはまだ事務所か？

SANA：あ、今日は珍しく帰るみたいだよ

博士：家の場所は知らんな……

博士：明日朝一で向かうか

SANA：なんでちひろさん？

博士：千川ちひろ

博士：旧姓は春川だ

カワイイ天使……偶然でしょう？

博士：幼馴染だ

SANA：なんか……都合のいい推理ゲームみたいな展開だね

博士：言うな

博士：あの馬鹿は何をやっているんだと頭を抱えている途中なんだ

カワイイ洗脳中（前編）

どうしてこうなった。

俺は何かを間違えたのか。

だとしたらいつ、何を間違えた。

もしくはこれは必然的にそうなってしまいう運命だったのか。
解らない。

この状況の意味がさっぱり解らない！

「聞いているんですか、ハルさん！ カワイイボクの話をし聞きするなんて、ものすつごく勿体無いですよ！」

「あ、はい。すみません……」

姉貴の家に移ってから翌日のこと。

夏休みの惰眠を貪っている中、突如としてこのカワイイ生物が家に戻ってきた。

名前は既に知っている、今をときめくアイドル芸人、輿水幸子その人だ。

輿水幸子のテレビで見たときのインパクトはいまでも覚えている。豹に追われていたか、イグアナに追われていたか、虎に追われていたか、はたまた蛇に追われていたか。

とてつもない自信と、自身の一切を曲げない意志は俺でさえ凄いと
思えるし、実物を目の前にして光栄だと感じることも出来る。

が、いま俺は彼女に長々とカワイイの定義を説かれていた。

「良いですか？ カワイイと言う言葉は一概に外見のことを表す言葉ではありません。性格や仕草、言葉遣いなども加味された全てを収束させ初めてカワイイと言われるんです」

「ええ、はい……仰る通りで」

「ボクはもちろんカワイイの権化たる存在ですが、ボクに及ばないに

しても蘭子さんも飛鳥さんもカワイイのですから、そんな二人を悲しませることはするべきではないと思います。違いますか?」

「はい……」

もう一度言う。

どうしてこうなった?

――

博士：ちひろさんと話がついた

博士：ハルの奴、火事で自宅が燃えてちひろさんの家に移り住んだようだ

博士：突然のことでスマホなども家の中だったようだな

カワイイ天使：なるほど、それで連絡できなかつた

博士：ちひろさんは二人がハルと知り合いだったことは知らなかつたらしい

博士：ハルとはあまり仲が良くないみたいだ

カワイイ天使：む?

カワイイ天使：ですが晶葉さん

カワイイ天使：ハルさんは知っていたんですね、二人がアイドルなこと

カワイイ天使：事務所なども知っていると思いますが

博士：だろうな

博士：しかしちひろさんは何も聞いていないらしい

カワイイ天使：どういうことですか?

博士：さあな

博士：まあ火事に遭った後だ

博士：頭が真っ白になつてもおかしくはないさ

博士：……あいつがそんな繊細だとは思わないが

カワイイ天使：……もしかして恋かもしれませぬ

博士：は?

カワイイ天使：噛みました

カワイイ天使：故意です

博士：わざとだろう

カワイイ天使：かみまみた

博士：やっぱりわざとだろう

カワイイ天使：まあそんなことは置いておいてください

カワイイ天使：もしかするとハルさんは故意にあの二人に伝えな
かったのかもしれない

博士：理由が不明だな

カワイイ天使：そうですか？

カワイイ天使：今やあの二人はダークイルミネイトとして人気に
なってきました

カワイイ天使：まあボクの方がカワイイでしょうが、あの二人も相
当有名になってきています

博士：ふむ

博士：身を引いた、と言いたいのか？

カワイイ天使：あなた達から聞いたハルさんのイメージを基に考え
たら、と言ったところですが

カワイイ天使：晶葉さんはまだハルさんにアイドルだと伝えてない
んですよ？

博士：タイミングが掴めなくてな

博士：しかし確かに、あいつは要らない気遣いをするからな

博士：特に最近ハル子と飛鳥にご執心だったようだ

カワイイ天使：二人にはもうハルさんのことは伝えましたか？

博士：ああ、LINEでな

博士：今日の仕事が終われば目を通すだろう

カワイイ天使：ふむ、では今日しかありませんか……

博士：何をやる気だ？

カワイイ天使：決まっています

カワイイ天使：ハルさんの真意を確かめるんです

カワイイ天使：もし何かしらの事情でさらに拗れてはいけませんか
ら

博士：……そうか

カワイイ天使：もちろんついて来てくれますよね！

博士：騙して悪いが仕事なんだな、ここで消えさせてもらおう
カワイイ天使：え”

――

夏休みでの惰眠はなんと素晴らしいことか。

そして宿題が燃え果てたという事実がなお睡眠を増長させる。
ああずつと寝ていたい。

ピンポーン

……いません。

僕はいません。

貝になりたい。

ピンポーン

やめてくれ。

そのチャイムは俺に効く、やめてくれ。

まったく人の睡眠を邪魔するなどけしからん不届き者だ。

昨日は遅くまで大惨事姉弟対戦をしていたというのに。

ピンポーン

まだ昼の一時だぞ。

こんな早い時間に来客するなど失礼ではないか。

そうとも、どうせここに家主はいないのだ。

そして俺がいることも知っているやつの方が少ない。

このまま寝ていれば帰ってくれるだろう。不在届ならポストにで

も入れといてくれ。あとで取りに行くから、姉貴が。

「春川春樹さーん、いませんかー?」

……は?

俺のことを知っている?

そして今の声どこかで……。

少しだけ覚醒した意識を窓に向ける。のそのそと這いずり、外を覗いてみた。

……何故だ。

何故、輿水幸子がいる。

そして何故俺を名指して呼ぶ。というか何故知っている。

ダメだ、謎が謎を呼ぶ。まるで長編ミステリーだ。このままじゃ埒があかない。

俺は気になってしまおうと眠れなくなる性質なんだ。

「……仕方ない」

輿水幸子から話を聞こう。そして俺のことを知っているのと何故ここに来たかの理由を聞いてお帰り願おう。そうすればまた安眠できるのだから。

そうして俺は、玄関の扉を開けたのであった。

今では、少し後悔している。

「……………え、えつとふえすね、あの、蘭子さんと飛鳥さんがですね

……………その、えへへ」

「……………うん」

「うひいっ!?! す、すみませ……………っ!」

俺を見るなり、輿水幸子さんは固まり、そして見るからに怯え出した。

俺の何がダメだったのか（夜更かし目付き）。

もう十分はこのまま立ち尽くしていた。外はいつも通りの夏の暑さ、二人とも汗を滝のよう流し、いや輿水幸子さんは違う意味で汗を流しているような気もするが。

「それで、えつと……あのお……」

「……なあ」

「ひゃい!？」

びくーん！ と気をつけをする彼女に、何か罪悪感を覚えながらも、俺は話を進める。

「とりあえず、外は暑いだろ。お茶出すから、入って話そう」

「え」

「……別に外で話すんならそれでも良いけど、さすがにずっとこのままキョドられるのも堪えるからな」

輿水幸子……もう輿水で良いか。輿水はオドオドと目をバタフライさせながら、迷っているみたいだった。

まあ当たり前だ。まったく知らない男と二人きりで過ごすと言うのも、アイドル関係なく女子としては嫌なことだろう。

そのまま帰ってくれ、そして俺をまた安眠させてくれ。

「えつと……じゃあ、お邪魔……します」
なんでえ。

リビング。

使われた痕跡があまりない新品同様の長机に对面で座り、キンキンに冷えた犯罪的な麦茶を挟んでお互い無言で過ごす。

俺は輿水の出方待ち。

輿水はどうだか知らないが、麦茶をちよびちよびと飲んでいて。小動物さながらの仕草を前に、謎のほんわかとした空気が醸し出される。これがアイドルか。

しかしこのままでは話が終わらない。日が暮れてしまう。仕方なく、自分から会話を切り出すことにした。

「自己紹介をしよう。俺は春川春樹だ。中学二年、確か同い年だった、

よなっ。」

「え、ええ……はい。こ、ここ輿水幸子、ですはい。よろしく願います」

「……あのさ、多分俺が悪いんだろうけど、なんでそんなに怯えてるんだ？」

「いえその……ぼ、ボク、よくよく考えてみたら同年代の男の子とあんまり話したことがなくて……その、男性のイメージが、Pさんだけだったので……」

なんでここに来たんだこの子。

何がそこまで駆り立てるのか？

「そうか、じゃあ俺にはどうしようもないな。慣れてもらうしかない。んで、本題。二宮と神崎のことか？」

「………はい」

「連絡しなかったのは悪かったよ。姉貴にでも言えばよかった。俺のせいで二人に要らない心配をかけたのは謝る」

「えつと、じゃ、じゃあ疎遠になろうとしたわけじゃないと？」

「それは……」

違う、とは言えなかった。

その気持ちが無かった訳ではないから。

「………なあ、輿水さん」

「は、はあい！」

「俺みたいなやつがさ、友達続けても良いのかな」

「え、さ、さあ……」

………。

今激しく、相談する人選を間違えた気がした。

「あのその、ボク男友達なんていないですし………そういうのちよつとよくわからないと言うか……」

この人なんでここに来たんだろう。

訳が分からないよ。

「でもその、あのですね………や、やっぱり、友達が減るのは悲しいと思う、んですけど……」

「……………っ」

分かってた、つもりだった。

今はたくさん友達がいる？

たくさんのファンがいる？

だからって、あいつらが友達を失う悲しさや寂しさを忘れるわけがないはずなのに。

「……………そう、だな。その通りだ」

「ええつと……………はい。と言う訳で、仲直りしましょう。だ、大丈夫です

！　　カワイイボクがちゃーんと仲直りを成功させてみせますから
！」

「ははっ、頼もしいな。でも、それカワイイ関係あるか？」

「ん？」

「ん？」

「えっ？」

「えっ？」

「はい？　　今なんと？」

「いや、仲直りするのにカワイイって関係あるかなって」

「正座です」

「えなんで」

「正座」

「はい」

そして、冒頭に戻る。

そんな地雷わかる訳ねえだろ。

最終回直前特別編

二年四組の学園祭

ー中学42期生総合裏掲示板102スレ目

217 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 14 23 : 25 :

43 ID : 6GnVERjJUX

学園祭お疲れさまっしたー

218 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 14 23 : 28 :

45 ID : OFLSRzj8fO

お疲れー

219 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 14 23 : 32 :

22 ID : Y3KciHaoxc

おっー

220 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 14 23 : 35 :

24 ID : BzFkV9YOFI

乙

221 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 14 23 : 40 :

59 ID : Wymsslwdaa

今回は……すごかったな

222 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 14 23 : 44 :

14 ID : 2UYxP2GZQo

永久保存版だけど二度と見返したくないな

223 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 14 23 : 49 :

31 ID : IREePRogGR

今回ばかりは春川に同情したわ

224 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 14 23 : 55 :

04 ID : PghYI9DUd8

ノリノリだったじゃん

225 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 14 23 : 58 :

48 ID : Og9kjESNxK

>>224 舞台上だけな。そのあと教室で一人黄昏てたの見たわ

226 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 15 0 : 02 : 5

6 ID: HEWyysfHfM

>> 225 悲惨すぎる…

227: 名無しの生徒諸君 2017/11/15 0:07:5

1 ID: WPZoOsf9Qx

春川「闇の炎に抱かれて消えろ！（迫真）」

228: 名無しの生徒諸君 2017/11/15 0:13:1

5 ID: fefRrIMF7h

>> 227 やめろ…もういい…っ…休め…!!

229: 名無しの生徒諸君 2017/11/15 0:18:0

7 ID: WsoFo9TMhQ

>> 227 あのシーン笑うとこなのに草も生えなかった

230: 名無しの生徒諸君 2017/11/15 0:21:4

0 ID: hzDr27HBSy

あのコピペはよ

231: 名無しの生徒諸君 2017/11/15 0:25:2

3 ID: pOJ4Ar1Zde

闇の帝王であり全世界を総る究極個体のHALが地球に現れて半年、地上のほとんどは荒廃し帝王の眷属である魔獣によって支配された。

HALから地球を取り戻すため、人類軍によって組織された特殊魔装部隊『ターゲスアンブルフ』に所属する「白き処刑人」アスカと「黒き魔術師」ランコは、ついに本拠地である魔界要塞『ウーアシュブルング』へと潜入する。

幾多もの犠牲を払い、闇の帝王HALと対面したアスカとランコは、魔装兵器「聖剣エクスカリバー」と「魔剣レーヴァテイン」を手に最終対決を始めるー

232: 名無しの生徒諸君 2017/11/15 0:29:1

3 ID: mmCWdqsvNh

>> 231 待ってた

233: 名無しの生徒諸君 2017/11/15 0:33:2

7 ID: MHZ4nu8tzv

>>>231これだけの文なのにツッコミどころ満載すぎてどこに突っ込んでいいか迷う

234：名無しの生徒諸君 2017/11/15 0:38:0

4 ID：WavfKUWob

結局何だったっけ。ラスボスが前文明の人類で、前文明を復活させるために新人類を滅ぼすって話だっけ？

235：名無しの生徒諸君 2017/11/15 0:41:5

4 ID：rWgIPMqOI

>>>234そんな裏設定あったんか

236：名無しの生徒諸君 2017/11/15 0:46:0

3 ID：6hMe4ceMj

>>>234そう。んでラスボスは前文明の人類すべての魂を内包してるからほぼ不死身&強大な魔力を持ち歯が立たない。でもランコの最終奥義である『救済すべきは人の悪、全ての声』《ゲバートリトウール》で魂を浄化し、HALの不死身性を無効化。ランコは力を使いまわし、アスカとHALの一騎打ちになる。

237：名無しの生徒諸君 2017/11/15 0:52:0

2 ID：6hMe4ceMj

>>>236続き

HALの魔力は一人でも強大で全力を出せば地球を粉々にすることも容易（地球を我が物にするために無傷で手に入れたい）。一方アスカは魔法が使えず白兵戦のみに特化した戦士タイプ。ランコの装備である聖剣エクスカリバーを受け取り、二刀流でHALに到達するために駆け抜けていく。

現人類の祈りの声がアスカにステータス全バフを施し、さらには魔法無効というチートっぷりをかまし、ついにHALに剣が届くまでの距離まで肉薄。HALは自身の魔装兵器〔王剣デュランダル〕を取り出し、激しい剣戟を行う。

238：名無しの生徒諸君 2017/11/15 0:55:3

9 ID：6hMe4ceMj

>>>237 続き

攻防の末、アスカは聖剣エクスカリバーと魔剣レーヴァテインを使った即席必殺技「無に解する魂の自刃《ゲミュートシユベールト》」を放ち、HALを打ち倒す。

ボロボロの肉体でそれでも自身の文明を復興せんと立ち上がるHALの気に圧倒されたアスカはトドメをさせないでいたが、ランコと力を合わせ、HALの魂を浄化させる。

HALの消滅、そしてアスカとランコは行方をくらませ、世界が平和になったという独白の後、一人の旅人が街に訪れる。商人の男が旅人に何をしに来たのか尋ねると、春川が演じる別人なのかHALなのか不明な男が「友人がここのパンを食べたいと（ランコが好きなパン）腹を空かせて待っているんだ」と言って終わり。

239 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 15 1 : 00 : 5

0 ID : 24mapA5fGE

>>>238 今更だけど文化祭でやる内容じゃねえな

240 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 15 1 : 06 : 3

8 ID : FILMKCmqJrs

>>>238 四組の奴らよくあれだけ演技上達したな

まあ神崎さんとか二宮さんに教えてもらったんならそりや上手くもなるだろうが。

241 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 15 1 : 12 : 3

3 ID : G53R6ynkio

>>>240 そりや練習したしめっちゃ

242 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 15 1 : 18 : 1

9 ID : Bril6ZILNOE

>>>241 お、四組か？

243 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 15 1 : 22 : 5

2 ID : R9Q02RIzdW

春川毎日練習してたよな。だいたい神崎か二宮が指導してたし

244 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 15 1 : 28 : 3

5 ID : UaWjQ4GxVe

>>243その過程でどつか壊れちゃったんだろうな……

245：名無しの生徒諸君 2017/11/15 1:32:0

3 ID:rdGSieSlkG

(でもぶっっちゃけ演技してた春川くんかつこよかったとは言えない)

246：名無しの生徒諸君 2017/11/15 1:37:5

4 ID:bcYDUDs8Fs

>>245(わかる)

247：名無しの生徒諸君 2017/11/15 1:41:4

7 ID:rdGSieSlkG

>>246(こいつ直接脳内!?)

248：名無しの生徒諸君 2017/11/15 1:47:2

2 ID:lWjRWAsLdr

(フアミチキ食べたい)

249：名無しの生徒諸君 2017/11/15 1:51:1

3 ID:uhJXENnp3m

(揚げ鶏が至高とあれほど……)

250：名無しの生徒諸君 2017/11/15 1:55:4

2 ID:DYW08ImJSO

(Lチキが至高異論は認めない)

251：名無しの生徒諸君 2017/11/15 2:00:3

4 ID:ezIYG2EWtE

>>245-250(念話使い多スギイ!!)

252：名無しの生徒諸君 2017/11/15 2:04:0

5 ID:ROSYZ5IMrJ

>>251(お前もかよお!!)

253：名無しの生徒諸君 2017/11/15 2:07:4

0 ID:sg9Ys8ZYhO

作中でも最後アスカとランコと過ごしている春川許さん

254：名無しの生徒諸君 2017/11/15 2:11:1

8 ID:RbaaoiIHAL

知るか

255 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 15 2 : 15 : 1

6 ID : l s I m i H R n k 0

明言はしてなかったし：

256 : 名無しの生徒諸君 2017 / 11 / 15 2 : 21 : 0

3 ID : A S K 2 C i S 3 q L

そんな言い訳立たないと思うけどね

――

1 / 2 のボク : とうとう明日だね

1 / 2 のボク : 準備は万端かい？

ハル : 気が重い

ハル : 胃が痛い

ブリュンヒルデ : そなたの努力は我々が保証しよう

ブリュンヒルデ : 貴様は如何にも闇の帝王HALである！

1 / 2 のボク : そうだね、ハルの努力はボクらが一番見て来たんだ

1 / 2 のボク : キミならHALを全てを演じきれんだろう

ハル : そういふ問題じゃねえ

ハル : 絶対明日から俺もお前らの仲間入りする…

ハル : 痛い奴を見る目で見られる…

ブリュンヒルデ : 我が従者よ、その身はすでに我らが支配し紅へと

染められている

ブリュンヒルデ : 時はすでに遅い

1 / 2 のボク : そうだね

1 / 2 のボク : それもこれもキミの自業自得であるということをお忘

却しないように

ハル : 分かっているよ…

ハル : やってやる、やってやるさ…

1 / 2 のボク : その意気だよ闇の帝王HAL

ブリュンヒルデ : 我らで明日の饗宴を共に果たそうぞ！

ハル……でもいざ決心したら今度は失敗しないか緊張して来た
ブリュンヒルデ……実は私も……

1 / 2のボク……ボクらはアイドルだからさらに失敗が目立つという

ね……

ブリュンヒルデ：我が従者よ

ブリュンヒルデ：その身に受けし呪いの解呪は進んでいるか？

ハル：おー……

ハル：なんとかLINEを見れるくらいには回復した

1／2のボク：キミが風邪を引くなんてね

1／2のボク：世にも奇妙なことがあるもんだ

ハル：バカだっけ言いたいのか

ハル：これで俺もバカじゃないということが証明されたな

1／2のボク：バカは体調管理ができないから風邪を引く

1／2のボク：と、どこかの三女が言っていたね

ハル：どちらにせよ、俺はバカだと……

ブリュンヒルデ：従者よ

ブリュンヒルデ：解呪を早める媒体の供物は如何であるか

ハル：来ない方がいいぞ

ハル：お前らに風邪をうつしたらそれこそ殺される

ブリュンヒルデ：むう

1／2のボク：ボクらが喉でも壊したら歌姫としての立場も危うくなる

1／2のボク：だからお見舞いはやめた方がいいよ

ブリュンヒルデ：飛鳥ちゃんは今どあんなに心配そうにスマホ見て

たのに？

1／2のボク：b b a s a

1／2のボク：そんなことあるわけないだろう

ハル：なんだ飛鳥、心配してくれてたのか

1／2のボク：ふん

1／2のボク：キミはボクにとって親友だからね

1／2のボク：人として当然のことだろう？

ブリュンヒルデ：給食に出たゼリーをお見舞いに持って行くのはど

うか聞いて来たのに

ハル：それはちよつと：

1／2のボク：ちが

1／2のボク：違う

1／2のボク：あれは

1／2のボク：そう

1／2のボク：今日の給食のゼリーが美味しくてね

1／2のボク：食べられないキミのために取っておこうと

1／2のボク：思ったんだ

ハル：などと供述しており

ブリュンヒルデ：我が前にて偽りの言葉は通用せぬ!!

1／2のボク：覚えてろ

1／2のボク：風邪が治ったら

ブリュンヒルデ：でも本当にお見舞いいいの？

ハル：まあ

ハル：そうだな

ハル：お前らの元気な姿でも観てればそのうち治るよ

1／2のボク：今日はボクらはテレビに出ないよ

ハル：録画してあるの観てるし

1／2のボク：……恥ずかしいからあまり観ないでほしいのだが

1／2のボク：いや、アイドルが言っている言葉じゃないな

ハル：私を見て!!と

1／2のボク：そこまでは言っていない!!

ブリュンヒルデ：分かった

ハル：？

ハル：おお……

ハル：これが噂の自撮り……

1／2のボク：撮るなら撮るって言ってくれ蘭子……

1／2のボク：変な顔になってたらどうするつもりだい

ブリュンヒルデ：映し絵はそなたをより美しく魅せるであろう！

ハル：ありがたやありがたや

1／2のボク：本人たちを目の前にその反応はいささか変態チツクではないかい？

ハル：可愛く撮れてるぞ

ブリュンヒルデ：飛鳥ちゃん固まっちゃった

ハル：ストレートに限るな

僕らについて（後編）

その日の夕方。

輿水はカワイイを俺に伝授するだけすると満足したのか、最初のキョドリっぷりも嘘だったかのようにフーン！ と凱旋していった。

「あれ……素だったんだな」

世の中には面白い人種がいるものだと思心して、すぐ近くに、今は遠くにいる二人を思い出す。あの二人より面白い人間はそうそういない。

玄関前に座り込み、俺は深くため息をついた。

「……………気持ち悪い」

会いたい。

あの二人に、直に。

なんだって変なプライドで断捨離したものを今更惜しんでんだ。

いやー悪かった、スマホが燃えて連絡できなかったんだ。

お前らの仕事も忙しいと思つてな、あんまり心配させることもないと思つて。

「……………莫迦か」

バカはお前だ、何様のつもりだよ。

あの二人がお前のことをそこまで気にしてるとでも？

ちよつと調子崩して、あの輿水が大げさに言つてるだけだ。

仲間のことだ、少しの変化も見逃しちやいられなかったんだろ。

「……………それなら？」

それなら、気にすることはないさ。

お前のそのちっぽけなプライドのためにもう二人とは一緒にいない方がいい。

いつか必ず、自滅するに決まつてる。

それでもー

ピンポーン

「……遅かったな」

「遅かったのはキミだ。この前みたいに間に合わせる気すらなかったのか？」

「こ、今度ばかりは、許さないから！」

ドア越しから聞こえた声に苦笑しながら、扉を開ける。

そこにいた二人は、まあ、予想通りの顔をしてたよ。

――

1／2のボク：殴る

ブリュンヒルデ：我が怨嗟は灼熱の業火を生み出し彼の者を焼き尽くすであろう

1／2のボク：彼に期待したのは間違いだった

1／2のボク：やはりボクたちから動くべきだったんだ

ブリュンヒルデ：左様

ブリュンヒルデ：我ら双翼の墮天使との約束を反故にした罪は重い

ブリュンヒルデ：その報いを思い知らしめてやらねば

1／2のボク：作戦会議だ

1／2のボク：あの愚か者を今度こそ縛り上げてやる

ブリュンヒルデ：囚人に魂の楔を！

――

さつきまで輿水と対面していた場所に、今度は神崎と二宮が座っている。
今日は来客の多い一日だ。掃除しといてよかったと心から思う。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あー、そのなんだすまなゴフツ!？」

謝ろうとしたら二宮から左ストレートの良いのを食らった。

「いやほんとすまばぐうー!」

「こつちが本命だ」

本来右利きの二宮の右ストレート。

野郎……二段構えか。

二宮は俺を二発殴ってすっきりとしたのか、ストンと腰を下ろす。そして次に神崎が立ち上がった。俺のそばまで寄ると、俺のヒリヒリとする頬をそつと撫でーそして平手打ちをかます。

「お、お前もか……」

「我らが怒りを思い知ったか？」

「はい……すみませんでした」

その言葉に満足したのか、神崎はふつと笑うとーそのまま反対側もビンタした。

「何故え!？」

「あ、飛鳥ちゃんも二回だったから……」

「当然の報いだよ。どうせならもう一発と行きたいところだ。今日は何故か、そう何故か、身体がもつと燃えろと鼓動を早めているからね」
ファイティングポーズを構える二宮にどうどうと手で抑えながら、俺は体勢を立て直し、そのまま二人に頭を下げる。

「……お前から逃げた。すまん」

「……理由を聞いてもいいかい？」

「私たちのこと、もう付き合えないと思ったの……?」

違う、俺が、差を見せつけられて焦ったからだ。

そして二人の邪魔だけはしたくなかったんだ。

格好悪いから、惨めだったから。

アイドルとして見ていないと言ったのも、言えば意識をしようから。

どれだけ目を逸らしても、彼女たちの輝きは無かった事にはできなかった。

「ボクらから逃げたいかい？」

ハッと息を飲み、二宮の方を向く。

二宮は意地の悪そうな、いやよくわからない。頬に赤みを帯びていて、恥ずかしそうで、それでいて妖艶さを醸し出している。

「何を……」

「キミが逃げたいなら、それでもいいさ。ただ勘違いしないでもらいたい。――世界がキミの思い通りになると思うな」

くつくつと意味ありげに笑いながら、二宮が片肘を机に置く。

「ボクらはキミと離れるつもりなんてないし、離れたくないんだ。だって数少ない、大切な友人、だからね。だからどれだけキミが逃げたいと、離れたいと思っても、ボクらはキミを逃がしはしないよ」

「貴様は我と契約せし従者である事を忘れるでないぞ。魂に刻み込まれている業は貴様を縛り付けている」

――驚いた。

まるで、自己中な奴に、お前自己中なんだよと言われた気分だ。

そして俺は、思ったよりも随分と前に、深く二人と繋がっていたんだ。

「俺は……お前らと一緒にいても、いいんだろうか」

「愚問だね。キミがそんなことを考える繊細な奴だとは思わなかったよ」

「わ、私からもお願いします！　い、いい一緒に、一緒に……いて、ください……」

真剣に考えてたのが馬鹿みたいだ。

思えば、そうだ。

厨二病は、遠慮なんかしないんだ。

自分のやりたいことをして、反抗して、キャラを演じて、そして――友達が少ないんだ。

数少ない友達が減るのは、寂しいもんな。

「よし、じゃあ先ずはスマホを買い直すことだね。今から出られるかい？」

「未成年でも買い直せるのか？」

「下調べしてあるよ。大丈夫だそう。まあ書類などは用意する必要があるけど。これ、ちひろさんに書いてもらった親権者の同意書、免許証だ。借りてるものだから今日中に返さない」と

準備良すぎじゃない？

「というか、姉貴にこの二人と知り合いなのがバレたのか……。色々と覚悟する必要があるかもしれない。いやきつとある。」

「我が従者よ。急ぐぞ」

「ちよ、待てつて。腕引つ張んな。あと引つ付くな！」

「アポロンが姿を隠し、アルテミスが顕現するまでの刻限が迫ってきている。我の魔力でも抑えきれないほど強力である」

「兵は拙速を尊ぶ、だよ。ぐずぐずしてる暇はないんじゃないかな」

グイグイと引つ張る神崎に、その背中を押す二宮。

そしてそのまま強引に外へと引つ張り出され、ギリギリの時間で携帯会社で契約を交わし、あっさりとした新しいスマホを用意した。

さすがに最新機種では無かったが。

帰るときにはすっかりと暮れてしまい、二人を女子寮へと送る。

その際色んな他のアイドルに見られたし、窓際でこつちに手を振る姉貴を見てゾツとしたが、ようやく忙しかった一日が終わった。

家に帰ってベッドに寝転び、スマホを見る。

データも何もかも消えたから、新しく登録し直した二人の繋がりの線。

そんな彼女らに送る、最初の言葉は、まあこれしかない。

――

ハル：ただいま

1/2のボク：おかえり

ブリュンヒルデ：闇に飲まれよ！

Stand by me

1 / 2のボク：夏休みももうすぐ終わりを迎えるね

1 / 2のボク：今年はずごく短く感じるよ

ブリュンヒルデ：然り

ブリュンヒルデ：遣わされた使命と、グリモアから生み出される英知への門に続く難題

ブリュンヒルデ：流石の我も苦戦している

ハル：おい

1 / 2のボク：しかし確かにアイドルとしての仕事も学校の宿題も両立しなくちゃなんてのはかなり厳しいものがあるね

1 / 2のボク：僕はもう終わらせたけれど、蘭子、キミのはどうだい？

ブリュンヒルデ：抜かりはない

ブリュンヒルデ：時期に終焉を迎えるであろう

ハル：おいつてば

1 / 2のボク：なんだい

ブリュンヒルデ：如何様か？

――

「リアルで会ってるのに黙々とLINEするこたねーだろ」

346事務所内部の休憩所。

俺たちは今そこに集まっていた。

建前としてはデスマーチ中の姉貴の着替えを持ってきた体で来たが、本当は二人に呼び出された。

「ふふふ。いやね、こうしてキミとこうやって会話するのもなんだか懐かしくてさ」

「いやいやいや、しなかったのほんの一日ふつかじゃねえか。しかもそれから毎夜の度に話してるし」

「むう、左様。これではいささか味気ないと思うが」

神崎も不満げにスマホを置く。その様子を見て二宮はふつと笑うと、いやニヤリと、か？ どちらにせよ意地の悪そうな笑みだ。

「うん、そうだ。でもそうだね。じゃあ本題に入ろうか」

その言葉を聞いた途端、神崎はビクンと跳ねる。驚いてそつちを向くと、露骨に俺から目を逸らした。

「なんだよ、本題って」

「なに、今回の件でボクはキミに言っただろ？ キミがボクらから逃げたいと思っても、決して逃がさないって」

「……それが？」

「うん、だからね。キミに呪いを授けようと思ってる」

呪い？

また神崎絡みかと思ってる、神崎の方に目を向けると、信じられないくらいに顔を真っ赤にした神崎がそこにいた。

今まで揶揄うとムキになって顔を赤くしていた神崎だが、それに比喩にならないくらいになっている。

「いいかい？ 蘭子」

「ううううううううううん。だだだだだだだだいじよぶだいじよぶ……」

「大丈夫かこれ、壊れたP S 2使った時の嫌な止まり方してるけど」

「大丈夫だよ、問題ない」

「それは大丈夫じゃねえよ」

この神崎の取り乱しよう、呪いって一体なんなんだ？

嫌な予感しかしないぞ。

「……言つとくが無理難題は聞かんぞ」

「それはキミ次第だね。大丈夫、強制はしないから。キミがどれだけボクらを思っているかで無理難題かどうかは変わるだろう」

「マジで何させる気だよ……」

そう呟くと、二宮は三本の指を立てて、俺に突きつける。

「三つだ。三つ、ボクらの言うことを聞いてほしい」

「……なんでもは聞かねえぞ」

「そういう保険を掛けても構わないさ。言っただろう、強制はしない」
「う、うむ……であるぞ。無理強いはせぬ。ただ、その……出来るだけ叶えてくれると」

強制はしない。

もはやこれ自体が呪いの言葉だ。ズルイとさえ思う。こいつらを前に、この前の件を振り返って、断れるなんて出来るのか？

「……まあ、聞くだけ聞くよ」

「その言葉が聞きたかった！」

……あ、これ二宮も緊張してるやつだ。神崎だけかと思ってたら、二宮も変なテンションになってやがる。

まあもう、どうとでもなーれの精神だから覚悟は決めただけども。

「まず一つ、ボクたちと名前呼び合うようにすること！」

「飛鳥、蘭子。これで良いのか？」

「ひうつ!？」

「き、キミに羞恥心は皆無のようだね」

嫌だつて、別に……晶葉だつて名前だし、紗南もそうだし。

特に今更気にする必要も……もつと酷いのを予想してたし……。

「で、ではそれでつ、次だ……」

「おいおい待てよ飛鳥、それは通らないぞ」

「うくつ、な、なんだい？」

立場的にはあちらが有利なのに、なぜか凄く上位にいる気分だ。

反撃するなら今しかない。

「俺が呼んだんだし、飛鳥も呼び合う仲と言ったじゃねえか。なあ？

蘭子」

「う、ううむ。そ、それで、ああるな……うむ」

「というわけで、はい。今度はお前らのターンだ」

「くつ、は、はる……」

「はるき……うううじゅ、従者あ……」

勝ったな（謎）。

そのあと、結局のところ俺の名前が呼ばれることはなく、LINE
ネームのハルで妥協することになった。

まさか一時間かけても呼べないとは思わなかった。

コホンと仕切り直して。

「二個目、だ」

「お、おう……」

「文化祭で、ボクらと一緒に劇をすること」

「無理だ」

即答だった。頭で理解する前に本能で答えていた。

「こいつらと劇？　正気か？」

「……どうしてだい？」

「いや、普通に無理だろ。お前らがどんな劇するかももう分かるもん。
ぜってー魔王とか悪魔とかそういうのが来るもん」

「帝王であるー！」

「変わらねえじゃねえか蘭子。いやいやマジで、しかもお前らプロと
劇なんざ公開処刑も良いところだろ」

「ちゃんと、ボクらが付きっ切りで指導するよ。プロトレーナーには
及ばないがそれなりには教えられる」

「左様。我々の持つペルソナは強固であり、自我を保つ能力である。
その力が我らは常人に比べ遙か上を行くのだ」

そりや中二病バリバリで現在進行形でキャラを演じてりやそうも
なるわ。

「まあこれはお願いというより決定事項に近いんだけどね」

「はあ？」

「文化祭で、ボクらは劇をすることに決めた。そしてその主役キャス
トにボクらを当てはめる。クラスのみんなも納得してくれているよ」

そう言って掲げたスマホの画面にはクラスLINEの画面が映し
出されていて、飛鳥の言う通りクラスのみんなも乗り気だった。と言

うかほとんどが俺に向けられた憐れみと嘲笑であったのは涙を禁じ得ない。

こいつ、前も思ったが前準備が良すぎる。根回しのプロかよ……。『ボクはこれでも情報戦には自信があるんだ。中二病の力を舐めないでもらいたいね』

「あーはいはい……つたく、なにが強制しないだよ。思いっきりしてやるじゃないか」

「別に強制はしてないよ。ただ、断れるものなら断ってみてくれとか言えないけどね」

そう言ってニヤリと笑う飛鳥。

さっきの時間、もう少し虐めておけばと少し後悔した。

「み、三つ目！」

俺と飛鳥の睨み合いに不穏さを感じたのか、蘭子が慌てて三本の指を立てて俺たちの間に割り込んだ。

その瞬間、飛鳥も蘭子も顔を赤くして俯き始める。何故だか凄く迷っているようだ。

「……で、三つ目ってなんだよ」

「三つ目は、その……」

「えっと……うん、まあそれはその……なに、まだ早いと言うか……」

「……………えへへっ」

訳がわからん。

二人はギクシャクとしながら、一枚の紙を取り出してきた。

「なんだこれ」

「け、契約書である。魂の盟約に従いここにハ……従者の印を授けよ」
「どちらにもだよ、絶対。あ、あと……契約書なんだからあとで無しと言うのは禁止だ」

何の契約書なのか読み込んでみると、そこには一文だけが記されていた。

『もし私たちが三つ目のお願い事をした時必ず頷くこと』

「……えーと、つまり。保留、つてことか？」

「ち、違うっ。それは……その、まだ早いんだ」

「お願い事はもう決まってるからー！」

ずいっと紙を差し出してきて、サインをしろと強請ってくる。

やはりこれのどこが強制しない、なのか。

まだ早い、願い事は決まっている……。

うむ、さっぱり分からん。

「……言つとくけど、無茶だけは言うなよ」

「………善処するよ」

「然り」

仕方なく、自分の名前を書く。

まあ、もう劇もすることになったんだ。

これ以上怖いものなどありはしないだろう。

「ほら、書けたぞ」

「……うん。じゃあ」

「……六年後、まで待ってて」

最後、蘭子がなんて言ったのか。

俺はその時、きつと聞き耳ロールをフアンブルしたに違いない。

「蘭子、ボクはもうハルに任せつきりにしないよ」

「うん。私も、だよ」

「これで魂の鎖の原型は出来上がった。完成まで六年。それまでに何とかして、ファンに認められるように努力しよう」

「大丈夫、だよ。きつと、私達なら、できるから」
「……三つ目のお願ひ事」
「それはー」

l l A n d d a r l i n , s t a n d b y m e .
ずっ と、 そ , ほ に い て。

Next STAGE!

博士：準備はできた

ハル：……そうか

博士：本当にやるのか？

ハル：ああ

ハル：見過ごしては置けない

博士：光のためか

ハル：それだけじゃない

ハル：あいつは今危険な状態なんだ

ハル：放って置けばどんな被害を生むかわからない

博士：そうだな

博士：それだけか？

ハル：……実はちよつと楽しみでもある

博士：素直でよろしい

博士：では、研究所へ呼び出しておこう

ハル：俺もすぐ向かう

―――↓AIラボ

「ねー、晶葉ちゃんこれなーに？」

「うおっ、いたのか紗南……」

いつの間にか背後にいた紗南に驚きながらも、スマホの画面を見せないように隠しながら晶葉は後ろを振り向く。

紗南が持っているのは開発途中の発明品であった。

「それはウェブシューターもどきだよ。製品版を改造してより本物に近づけたんだ」

「ウェブシューターって……スパイダーマンの糸出すやつ？」

「ああ。助手が発案してな。糸の強度や、それに伴う射出距離、速度……というかそもそも蜘蛛の糸もどきを作るのにかなり苦労したんだ。それでも原作に並ぶ理論値には達しなかったが」

「この手袋は？」

「一緒だよ。スパイダーマンの壁に上るというイメージをもとに作った。靴とマスクもあるんだが、あいにくスーツを作る時間がなくな。今はそれだけ」

「ふーん……」

説明し終えて、晶葉は再度机に向かい、大至急で開発している発案品に取り掛かる。小手のような形状の手袋だ。

「ああ、万が一にも腕にはめて掌にあるボタンは押すなよ、それをしたらー」

ピッ！

不穏な音が響く。晶葉は恐る恐ると再び後ろの方へ振り向くと、紗南が引き攣った笑みを浮かべて、こちらを見ていた。

「……そ、それしたら？」

「……キミがその装置を唯一使えるように登録され、それはキミのになる」

「そ、そそして？」

「元々それは助手に授ける武器だったのだが、キミしかそれを使えないのなら、話は別だ」

「………つまり？」

「ーおめでどう、君がスパイダーマンだ」

どちらかといえば、ガールだがね。と、最後に晶葉が締めくくった後、紗南の悲鳴がこだました。

程なくして、その場所に春川春樹ーハルが到着する。

ハルがラボ内部に入れば、そこには悠々と空中を飛び跳ね行き来する紗南の姿があった。

「………ええ」

「おお、よく来たな助手よ。どうだ？」

「どうだじゃねーよ。どうすんだこれ……俺のウェブシューターじゃなくなっただけじゃねえか」

「不慮の事故だ」

「あははははは！ すっごーいVR以上だよこれ!!」

糸を出してターザンしたり、壁にひつついて登ったりと、まるで本当にスパイダーマンのようなことをしでかしている紗南に、ハルは羨ましげに見つめる。

「まあいい、本命は？」

「もう出来てる。ほんの数分前にね」

晶葉に連れられ、ハルは机の前まで来る。そこには完成された手袋と、そしてー円盤状の薄い盾があった。

「さすがにヴィブラニウム合金なんてのは、衝撃吸収をする金属など夢のまた夢だ。と、私も思っていたが……」

「……菜々さんか」

「驚いたよ、まさか本当に……宇宙人だったとは」

ウサミン星人である安部菜々さんのツテで手に入れた特殊金属、それにはヴィブラニウム金属と同じ衝撃吸収の特性があるとされた。

その金属と鉄を合わせて作られた、仮称ヴィブラニウム合金を使い、作成された盾が、ここにある。

「保証しよう、これにはキャプテン・アメリカも満足する」

「使いこなせなければ意味がない、だろ？」

「その辺りは彼女に一任する。超人血清なんてそれこそ夢の話だ。人間科学は専門外だしね。それこそ志希さんに頼めばいいだろう」

「俺あの人苦手なんだよ……何考えてんのかさっぱりわからん」

「天才とはそういうものだ……私に合わせられるキミの方が不思議だね、私としては」

ハルが盾を手にする。見た目より軽く、そしてしっかりとした強度がある。

ガチャ、と扉の開く音がする。瞬間的に、ハルはその盾を、扉を開けた者に向け一回転してまで大きくまっすぐに投げた。

盾は、その者によって難なくキャッチされる。

「よお、遅かったな。……割と本気で投げたつもりだったが？」

「これくらいしなければ麗奈は止められないからな。ハル、ウェブ

シューターの出来は……」

「ん、光も来たの？　　ってなにそれ！　　キャップの盾!？」

天井から糸でぶら下がって降りて来た紗南が、光の持つ盾に驚く。

光も紗南がウェブシューターを使っているのに驚いていた。

「……晶葉のせいだ」

「すまん」

「……紗南を巻き込むのか？」

「麗奈を止めるんでしょ？　　誤作動させちゃったアタシが悪いし

ね。頑張るよ！」

そう言って紗南はまたも糸を飛ばし跳び回っていた。その状態を見て光はため息を吐くと、机の上にある手袋を見つけ、それを左腕にはめる。

「ちやんとくつつくのか？」

「会心の出来だ。ウェブシューターよりは難しくないしな」

「ああ……俺のウェブシューター……摩天楼を跳び回ったかった」

「諦めろ」

項垂れるハルを尻目に、光は拳を深く握りスイッチを作動させる。すると盾は強い力で腕に引っ張られ、硬くくつついた。

「……気分は？」

「いつだって正義のヒーローさ」

「麗奈、こんなことをしてもマトは喜ばないぞ」

「光い……アンタは、アタシの……マトの何がわかるってのよ！」

交錯する思い

「うわわ、あぶなっ。二人とも！　　戦うんなら街に被害出さないでよ！」

「紗南！　　子どもが下に!!」

「分かってるよ！」

正義と悪の戦い

「マトの遺産……遺していった想いで、アタシはアタシの正義を行う」

「そんなものは正義じゃない！」

「悪い奴を倒す、アンタのそれとどう違うって!？」

矛盾していく苦悩

そして……

「敵の目的はマトの発明だ。あいつら、マトの発明品を装備してやがる」

「ハル、勝てるのか……?」

「そのためにみんなが来た」

集結する、アイドルたち――!

キャプテン・アイドル くザ・ファースト・アベンジャー

10/06

「なんでアメコミの装備なの? 仮面ライダーとか戦隊ヒーローと

かでもよかったじゃん」

「アタシだってリボルケイン振り回したかったよ」

「無茶を言うな。あんなのほぼ大量破壊兵器だぞ。捕まるだろう」

「そこ?」

後日談

「ゼウス、これは一体如何なるアカシックレコードか？」

「父さん、教えてくれるかな」

休日の昼下がりがリー娘二人が、不思議そうに一枚のDVDを手渡し
てくる。

俺は片方の娘の言葉遣いにこめかみを抑えながら、そのディスクに
ついてに思考を割いた。

表には何も書かれていない。真っ白なそれについて、俺は何も思い
つかない。

「分からん。見てみるか？」

「エッチなものじゃないだろうね。子ども前でそんなもの見せるな
んて最低だよ」

「分からんって言ってるじゃないか。じゃあお前は見ないんだな」

そう意地悪を言うと、ムツとしたようにいつも不機嫌そうな口元が
さらに下降する。

「そうは言っていないじゃないか。大人はいつも決めつけたがるね。こ
れだから父さんはいつも母さんたちと喧嘩してるんだよ」

「すぐに仲直りしてるだろ？」

「知ってるんだぞ。いつもいつも父さんが母さんたちに何かしてご機
嫌をとってるの。何してるか知らないけれど、あまり褒められたこと
じゃないな」

「お前も決めつけるじゃないか……何って言われてもな。ん、こっち
に来な」

ちよいちよいと、手で招く。怪訝そうな顔で恐る恐ると近付いて
きた娘を、そのまま抱っこし、その頭を撫でた。

「あー!! ずるいずるいー!! 我も、我も!!」

「ああ後でな。ほら、どうだ？」

「むう……こんなことでボクの機嫌が取れるとでも？」

「ダメか? じゃあ交代だな」

「……………取れないとは言っていないじゃないか」

ぎゅっと、降ろそうとした腕を掴む。

全く、親に似て素直じゃない奴め。

「偉大なる王にして、えーと、聡明な賢将である我を忘れるでない！

次！ 次私、わーたーしー!!」

「はいはい。ほら、代わってやれ」

「やれやれ、仕方ないな」

さっそく交代する。すると、するすると抱っこではなく首の上に跨ってきた。

「我は巨人を従えしティマーぞ！ こっちがいい！」

「ああもう、肩が痛いってのに……………よいしょーっと」

「ふははははははははははははははは……………は、は」

肩車を持ち上げると、**威勢の良さが一転し、ブルブルと震えながら**俺のおでこを辺りに抱きつき動かなくなる。

「どうした？」

「た、高い……………怖い……………」

「ああ……………はいはい。つたく、お前も親に似て臆病な奴だな」

「私も抱っこ。抱っこがいい」

「はいよ」

一旦腰を下ろして、再度娘を腕で抱える。

先ほどの喧しきもなく、背中に手を回して眠るように落ち着いていた。

「……………お父さんあつたかい」

「お前は暑苦しい」

「むうう……………お父さんのいじわる」

「それで？ これを入れればいいのかな？」

「ん、ああ。まあ見てみりやわかるだろ」

「……………ほんとにエッチな奴じゃないんだよね？」

「期待するなよ」

「期待なんかしていない!!」

むっつりめ。

娘がふんと鼻を鳴らし、少し乱暴にDVDをデッキに入れ、再生ボタンを押した。

なにかのカメラ映像のようだった。誰かの録画映像か？

見覚えのある劇場。体育館のようだ。

待て。

おいこれは……。

『闇の炎に抱かれて消えろ!!』

「ぎゃあああああああああああああああ」

!!!!!!

すぐさま映像を消そうと動こうとするが、娘が抱きついているため上手くリモコンを取れなかった。そしてその隙に、もう一人の娘がニヤリとした表情でリモコンを掠めとる。

「これは、若かりしゼウスか?」

「おやおや、我らが偉大なるお父様がまさかこんなことをだなんてね。ははっ、あの暗幕はマント代わりかい?」

「うるせえ! リモコン返せ!」

「あつはつは、そんな気の早いことを言わないでおくれ。もう少し鑑賞しようじゃないか」

そう言うと、娘は素早くリモコンから電池を抜き取り、意地悪くりモコンを俺の手が届く範囲にわざと置きやがった。

画面では、あの時の文化祭の劇が垂れ流されている。

何故だ。あの時の映像は全て焼き払ったはずだ。なのに何故あれが俺の家にある。

蘭子か? 飛鳥か?

あの二人が帰ってきたらとつちめなければ。

「わあ、これはヘラか!？」

「母さんもいるようだね。なるほど、父さんと母さんたちは敵対して
いて、父さんは帝王なのか」

「やめろお……やめてくれえ……」

黒歴史のフラッシュバック。

いやほんと、あの頃の記憶は消し去りたいのだ。

火事の件とか!!

「いいね、恐らく母さんにも効くだろう。これから面白くなりそうだ、
ククク」

「あの聖剣と魔剣はなんだ!? かつこいい!!」

蘭子。

飛鳥。

帰ってきたら、道づれだからな……。